

# 史跡 大石塚・小石塚古墳

—保存事業に伴なう調査報告—

1980年3月

豊中市教育委員会

# 史跡 大石塚・小石塚古墳

—保存事業に伴なう調査報告—



（縁割埴輪）

1980年3月

豊中市教育委員会



## 序 文

住宅やマンションが隙間なくたち並んだ現代の住宅都市豊中の下に、もう一つの住宅都市豊中が隠されているという事実は、ともすれば見逃されがちである。これまでに市域で確認された遺跡は百数十箇所にも及び、今なお新しい遺跡が次々と発見されているが、古代の住宅都市豊中の様相は、近年の相次ぐ発掘調査によって、次第に明らかにされつつある。しかしながら、一方において、現代の住宅都市豊中の形成過程における土地の造成や住宅の建築などによって、多くの遺跡が姿を消していったことは、止むを得ないことはいえ、まことに残念なことといわなければならぬ。これから街づくりの中で、残されたこれらの貴重な歴史遺産としてのもう一つの豊中を、いかに保存し、活用し、新しい豊中と調和させてゆくかということが、我々に課せられた大きな使命であるといえよう。

大石塚・小石塚古墳は、当市における数多い遺跡、文化財の中でも、最も代表的なもの一つであり、国の指定を受けた唯一の史跡である。公有化後、内城を広く市民の利用に供するため、保存整備工事の実施が、かねての懸案となっていたが、このたび、文化庁、大阪府教育委員会など関係機関のご理解を得て、工事が着手できるはこびとなり、その前段階として今回の調査を実施するに至ったものである。古墳範囲の確認を主目的とする部分調査ではあったが、幸いにも、いくつかの新知見も含めて、かつての住宅都市豊中を解明するための多くの資料を得ることができた。引続き、調査結果に基づいて、現在整備工事が進められており、完成後は、市民が身近に接することのできる生きた郷土史学者の場として、また、恵まれた自然環境を生かした散策の場として、生まれ変わることになっている。

終りに、本調査の実施にあたり、多大のご援助をいただいた、鳥越憲三郎博士をはじめとする関係各位に、深く感謝の意を表し、刊行の旨意としたい。

昭和55年3月

豊中市教育委員会

教育長 北原 富男

## 例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が、昭和54年度文化財保存事業（総額10,000,000円、うち国費50%、府費25%）の一環として行なった史跡大石塚・小石塚古墳範囲確認調査（調査費4,000,000円）の報告書である。
2. 調査は豊中市文化財保護委員会鳥越憲三郎氏・大阪府教育委員会文化財保護課主査井藤徹氏の指導および助言を受けて、柳本照男（豊中市教育委員会文化財担当職員）が担当し、昭和54年6月24日より9月26日まで実施した。
3. 文化庁記念物課文化財調査官牛川啓幸・同河原純之の両氏には、調査の実施および整備計画の作成にあたって指導・助言を得た。
4. 地輪については川西宏幸氏、墓石については奥田尚氏に御教示を得た。特に奥田氏には急な依頼にもかかわらず確定報告を快く承諾していただいた。
5. 調査、および報告書作成にあたっては、藤沢一夫、藤井直正、荻山昭次、瀬川芳則、泉森咬、樋本誠一、石神怡、島田義明、宇治田和生、下村晴文、闇川尚功、加古千恵子、渡辺昇、生田雅道の諸氏、ならびに奈良県立考古博物館 勝部明生 千賀久、天理参考館 清田雅昭、平安博物館、神戸市教育委員会 奥田哲通、田辺町教育委員会、池田市教育委員会の各機関、諸氏に御教示、御協力を賜わった。記して感謝いたします。
6. 本書の作成については、遺物実測を主に木下亘、柴田信次、増田真木、製図を田中晋作、木下亘、服部聰志、造物写真を田中晋作、柴田信次が行なった。執筆は、出土遺物を服部聰志、その他を柳本照男が担当し、編集は柳本照男、田中晋作が行なった。

## 調　　査　組　織

調査主体 豊中市教育委員会

調査指導 大阪府文化財保護審議会委員・豊中市文化財保護委員 鳥越憲三郎

調　　査　員 豊中市教育委員会社会教育課文化財担当職員 柳本照男

調査補助員 田中晋作、服部聰志、増田真木（関西大学）

木下亘、古庄浩明、坪内登美枝（国学院大学）

黒飛誠巳、福田薰、前田和徳、徳田彦次、田中孝典、阪本正幸、高橋正則

北岡雅臣、森口訓男（大阪経済法科大学）

整理指導員 厚美正子

整理作業員 塩田多佳子、沢京子、大石登茂子、倉中さち代、

堤朋子、兼田伊子、福井真由美（大手前女子大学）

調査協力者 横本正幸

## 本文目次

I 調査の契機	1
II 位置と環境	3
III 明治の記録にみる小石塚・大石塚古墳	5
IV 調査の経過	
1. 目的と方法	6
2. 調査日誌抄	6
V 小石塚古墳	
1. 墳丘	8
(1) 後円部	8
(2) くびれ部	10
(3) 前方部	12
2. 主体部	14
3. 出土遺物	18
VI 大石塚古墳	
1. 墳丘	24
(1) 後円部	24
(2) くびれ部	31
(3) 前方部	37
2. 出土遺物	41
VII まとめ	
1. 選地について	52
2. 墳丘築造について	53
3. 築造年代について	54
付載 大石塚古墳使用の葺石の石種とその産地について	59

図版12 大石塚古墳 西側くびれ部

- (1) 第6グリッド 西側くびれ部付近
- (2) 第7トレンチ 墳丘根部断面状況構

図版13 大石塚古墳 東側くびれ部

- (1) 第5グリッド 墓石、埴輪列
- (2) 第5グリッド 1段目テラス、墓石、埴輪列

図版14 大石塚古墳 東側くびれ部

- (1) 第5グリッド 2段目テラス埴輪列
- (2) 第5グリッド 2段目斜面葺石

図版15 大石塚古墳 前方部

- (1) 第8トレンチ 西側
- (2) 第8トレンチ 東側 2段目テラス埴輪

図版16 小石塚古墳 出土遺物

図版17 大石塚古墳 出土遺物

図版18 大石塚古墳 出土遺物

図版19 大石塚古墳 墓輪細部

## 挿 図 目 次

第1図 整理風景	1
第2図 周辺遺跡分布図	2
第3図 明治の絵図面（豊中市史より）	5
第4図 第1トレンチ 断面図	9
第5図 第3トレンチ 断面図	8, 9
第6図 第6グリット 東側くびれ部断面図	10
第7図 第6グリット 墳丘面観察図	11
第8図 第7トレンチ 墳丘面観察図	11
第9図 第7トレンチ 西側くびれ部断面図	10, 11
第10図 第8トレンチ 断面図	12, 13
第11図 第9トレンチ 断面図	13
第12図 第11トレンチ 断面図	14, 15
第13図 小石塚古墳 主体部平面図	16
第14図 小石塚古墳 原墳丘測量図	17

第15図	壺形土器出土状況	18
第16図	須恵器、土師器実測図	20
第17図	壺形土器実測図	22
第18図	小石塚古墳出土埴輪実測図	23
第19図	大石塚古墳 原墳丘測量図	26
第20図	第1トレンチ 断面図・平面図	27
第21図	第2トレンチ 断面図・平面図	29
第22図	第3トレンチ 断面図・平面図	29
第23図	第4トレンチ西側部分 断面図・平面図	29
第24図	第4トレンチ東側部分 平面図	29
第25図	第5グリッド 平面図・立面図	30
第26図	第7トレンチ 断面図・平面図	32、33
第27図	第6グリット 平面図・立面図	34
第28図	第6グリット 断面図・立面図	35
第29図	第11トレンチ 断面図・平面図	37
第30図	第8トレンチ西側部分 断面図・平面図	38、39
第31図	第8トレンチ東側部分 断面図・平面図	39
第32図	第5グリッド出土形象埴輪	43
第33図	第5グリッド出土遺物実測図	44
第34図	高杯脚部	44
第35図	埴輪表面調整拓影	45
第36図	大石塚古墳出土埴輪実測図	48
第37図	大石塚古墳出土埴輪実測図	49
第38図	大石塚古墳出土埴輪実測図	50
第39図	大石塚古墳出土埴輪実測図	51
第40図	III地形想定復原図	52

## 図版目次

図版1 大石塚・小石塚古墳 墳丘測量図

図版2 調査前の状況

(1) 小石塚古墳

(2) 大石塚古墳

図版3 小石塚古墳 後円部

(1) 第1トレンチ

(2) 第2トレンチ

図版4 小石塚古墳 くびれ部

(1) 第7トレンチ 西側くびれ部

(2) 第6グリッド 東側くびれ部

図版5 小石塚古墳 前方部

(1) 第8トレンチ 前方部東側

(2) 第8トレンチ 墳丘断面

図版6 小石塚古墳 前方部

(1) 第10グリッド 前方部東側コーナー

(2) 第12グリッド 前方部西側コーナー

図版7 小石塚古墳 堀状遺構

(1) 第3トレンチ 堀状遺構

(2) 第8トレンチ 堀状遺構外側肩部

図版8 小石塚古墳 主体部

(1) 上面

(2) 前方部より

図版9 大石塚古墳 後円部

(1) 第4トレンチ西側部分 1段目葺石、埴輪

(2) 第2トレンチ 1段目葺石、埴輪

図版10 大石塚古墳 後円部、西側くびれ部

(1) 第4トレンチ東側部分 2段目テラス格円形埴輪

(2) 第6グリッド 2段目テラス埴輪列

図版11 大石塚古墳 西側くびれ部

(1) 第6グリッド 前方部より

(2) 第6グリッド 後円部より

## I 調査の契機

周知のように桜塚古墳群は、現市域の中心部を形成する豊中台地上に築かれた北摂地域に於ける代表的な中期古墳群である。その中で大石塚・小石塚古墳は、かつて古墳群を構成していた36墳中最西端に位置し、その名称からも想像されるように大小2基の前方後円墳から成るものである。又両者はほぼ南北を主軸とする同一線上に配置され特異な外観を呈している。商店や住宅が密集する繁華な市街地に位置している為、既に群中の大半の古墳が消滅の運命をたどるという埋蔵文化財の保存上最悪の立地条件下にありながら奇跡的に破壊の手を免れ、しかも比較的良好な状態を保って保存され現在に至っている。このことは両墳を含む現阪急電車岡町駅西側一帯の広大な地域がかつて原田神社の所領にかかる山林であり、特に当古墳はごく最近に至るまで同神社の聖域として秋の獅子神事に関連する祭祀の場であったという事実と無関係ではなかろう。因みに、この原田神社旧境内は古く天明年間、弥生時代に於ける最も特色ある遺物の一つである銅鏡2口が出土したことが知られている市域では唯一の地域であることも特筆すべきである。尚、当古墳群ではこの他、大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚古墳(一部)の計3基がいずれも市有地及び市指定文化財として保存が図られている。

大石塚・小石塚古墳は、昭和31年5月15日に指定を受けた当市では唯一の国史跡で、現在各地で進められている史跡指定地域の公有化事業の一環として、昭和47・48年の2ヶ年度において豊中市が現所有者・原田神社より買上げたものである。その後、その活用策として、内城を広く市民に開放するため保存整備事業の実施が急がれていたが、このたび昭和54年度国庫および府費補助事業として、その一部着工が認められたもので今回の調査はその一環として具体的な整備計画案を作成するために必要な古墳範囲(規模)や周濠跡の確認など、考古学上の基礎資料を収集することを目的として実施したものである。

現地における発掘調査作業は昭和54年6月25日から着手、同9月26日に完了し以後遺物整理および報告書の作成にあたった。



第1図 整理風景



- |               |             |                |
|---------------|-------------|----------------|
| 1. 豊池西遺跡      | 9. 原田神社出土銅鐸 | 17. 豊島北遺跡      |
| 2. 御神山古墳      | 10. 下原窯跡群   | 18. 利倉北遺跡      |
| 3. 南刀根山遺跡     | 11. 原田遺跡    | 19. 利倉遺跡       |
| 4. 新免宮山古墳群    | 12. 曾根遺跡    | 20. 椿堂遺跡       |
| 5. 金寺魔守(新免魔寺) | 13. 城山遺跡    | 21. 利倉西遺跡      |
| 6. 新免遺跡       | 14. 田能遺跡    | 22. 上津烏猪名川川床遺跡 |
| 7. 新免上佃古墳     | 15. 勝部遺跡    | 23. 服部西遺跡      |
| 8. 櫻塚古墳群      | 16. 曾根南遺跡   | 24. 稔積遺跡       |

第2図 周辺遺跡分布図

## II 位置と環境

豊中市、吹田市にまたがる千里丘陵は島熊山（標高133m）を頂点としていくつかの小丘陵に派生しながら大阪湾方向に緩傾斜する。その南西方向にはり出した一支丘陵上に立地する大石塚、小石塚古墳は北西方向に流れる千里川、東方を南北に流れる天笠川によって挟まれた標高50mから20mにゆるく傾く台地の南西端に位置し、西方の西摂平野を望む。周辺の遺跡としては西方の低地、猪名川によって形成された沖積平野に多くの集落遺跡が知られる。弥生時代の遺跡として著名な田能遺跡、勝部遺跡をはじめ、空港A・B地点遺跡、利倉遺跡、利倉西遺跡、上津島川床遺跡、穂積遺跡、島田遺跡、庄内遺跡と南下するに従って時期も下り古墳時代以降定着しているようである。このように低地においては集落遺跡も多く明らかにされつつあるが、台地上の遺跡となるとあまり多くは知られていない。そのうち時代の古いものから記すと、縄文時代後期前半註1を中心とする野畠遺跡や石鎚等が散布する上野遺跡が台地の奥まった所に位置し、また弥生中期註2の方形周溝墓群として著名な宮の前遺跡の付近でも石棒が出土註3している。また西方の低地では空港A・B地点遺跡がよく知られている。弥生時代の遺跡としては前述したように宮の前遺跡が著名で台地上では唯一の調査された遺跡である。そのほか千里川沿いに奥まった所より中期の野畠春日遺跡、平野部に出る丘陵上刀根山丘陵の最南端に南刀根山泰棺出土遺跡、その対岸に同じく後期の新免遺跡などが若干知られている。また南方の台地上では最南端で後期の曾根遺跡、竪穴住居跡が確認されている原田遺跡があり、特に原田遺跡は古式土師器を出土しており、古墳時代の住居跡として注目される。東方にも中期の城山遺跡、天笠川沿いの低地にある長興寺遺跡などが知られる。この周辺の弥生時代の遺跡を考える上で興味深いことは、銅鐸が数箇所で発見されていることである。ごく近辺に限っても原田神社境内出土のもの、空港A地点付近出土の伊丹市中村銅鐸、利倉遺跡出土の飾耳片などがあり、勝部、田能遺跡の東方をとりまく地点で出土している。ここで古墳に目を転じてみると、北方より猪名川右岸長尾山系に所在する万籠山古墳、その左岸にある堀三堂古墳、池田茶臼山古墳、待兼山古墳、御神山古墳、新免上仙古墳と前期古墳の内容を示す古墳が独立高所に位置し、西摂平野を望んでいる。中期古墳としては桜塚古墳群が著名である。そこで桜塚古墳群について若干ふれてみると、現在、大石塚、小石塚古墳を含め、大塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳とわずか5基を残すにすぎないが、幸いにも明治の古図と記録註4によって、今は消滅してしまった古墳を知ることができる。それによると総数36基、墳形は前方後円墳、円墳、方墳で半数以上が周濠を有し、大きく大石塚、小石塚古墳を中心とした西群と大塚、御獅子塚古墳を中心とした東群とによって構成されている。そのうちでも西群においては大石塚、小石塚古墳を中心に20基がかたまって存在し、他は周辺に点在している。20基のうち前方後円墳3基、他は円墳で大石塚、小石塚古墳を中心に北側と南側に集中している。立地の条件としては、小石塚古墳北側の円墳群が丘陵最高所よりのゆるやかな斜面に位置し、第4号墳とされているものには石棺の露出している状態が描かれていて注目される。他の古墳はそれより下った

平坦部に位置している。東群は前方後円墳 2 基、方墳 1 基、他は円墳で構成されている。立地の条件は平坦な台地上に同じように位置している。そのうち、狐塚、北天平塚、南天平塚古墳が調査されており、内容のわかる古墳である。中期古墳としては桜塚古墳群をあげうるにすぎないが、その東方約 1 km の服部緑地公園内に円筒埴輪をめぐらし、両側に造り出しをもつ東面の前方後円墳<sup>註 8</sup>の梅塚古墳が単独で存在していたことが知られている。しかし公園整備に伴って、現在中央花壇の一部に面影を残すだけである。後期の古墳は、新免宮山古墳群と太鼓塚古墳群とがよく知られ、新免宮山古墳群は横穴式石室に陶棺を用いている。また東側に白鳳期創建の金寺庵寺があり、寺と古墳との関係が注目されている。<sup>註 9</sup>太鼓塚古墳は桜井谷古窯跡群中、千里川右岸の丘陵上に立地し、同じく横穴式石室に陶棺を納めている。このように付近の後期古墳は須恵質の陶棺を使用し、また近辺に古窯跡がひかえていることより、須恵器生産者集団との密接な関係が想定される。<sup>註 10</sup>桜井谷窯跡群は通称千里古窯跡群（大阪北部古窯跡群）中の西部地区で陶邑古窯跡群（大阪南部古窯跡群）より若干遅れて生産が開始され、南方より北方に移っていくようである。<sup>註 11</sup>歴史時代の遺跡としては、特に山田寺や四天王寺と同范の軒丸瓦を使用する金寺庵寺が猪名川左岸唯一の古代寺院として注目される。このように弥生時代以降、この周辺が西摂平野東麓の中心として脈々と続いていたことがうかがわれる。

註 1 昭和51年豊中市教育委員会調査、整理中、堺田啓一「縄文遺跡と土器の文化」『大阪府史』第1巻2節に概略が報告されている。

註 2 岩田好久「宮ノ前庭式道路(山上の石棒)」『池田市史史料編』1原始

註 3 佐原亮「縄文時代」『考古学からみた伊丹地方』伊丹市史第1巻

註 4 藤沢一夫「弥生文化とその諸遺跡」、豊中市史第1巻2節に各遺跡が詳解されている。

註 5 註 2 と同じ。

註 6 烏田義明「利倉遺跡」、利倉追跡発掘調査団 1976

註 7 「彦日三十六塚全国、明治7年、「三十六塚所在絶図」明治12年、「諸墳略図面書上」明治14年

註 8 小林行雄「狐塚・南天平塚古墳の調査」『大阪府の文化財』、小林行雄「大阪府豊中南天平塚の発掘」『考古学』第8巻9号1937

註 9 藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」豊中市史第1巻第3節

註 10 註 9 と同じ。

註 11 堀田義明「桜井谷窯跡群、豊中市教育委員会その他

註 12 石田茂作「衆島時代寺院址の研究」、藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」、豊中市史第1巻第3節、昭和54年春に一部分豊中市教育委員会が調査を行なった。

### III 明治の記録にみる小石塚・大石塚古墳

明治7年、同12年、同14年に古墳取調べがあったことがうかがわれ、それぞれ「巣目三拾六墳全図」「三十六墳所在總図」「諸墳略図面書上」と題して記録されている。それらによってみると、小石塚古墳は東西16間、南北32間、後円部高1丈1尺、前方部高6尺で周濠を有している。大石塚古墳は東西25間、南北48間、後円部高1丈7尺、前方部高7尺、塚幅3間4尺～4間半と記してある。

	東 西	南 北	後円部高	前方部高	塚
小石塚古墳	16間 (29m)	32間 (58m)	1丈1尺 (3.33m)	6尺 (1.81m)	有
大石塚古墳	25間 (45.45m)	48間 (87.26m)	1丈7尺 (5.15m)	7尺 (2.12m)	3間4尺～4間半 (6.66m～8.18m)



第3図 明治の絵図面(豊中市史より)

## IV 調査の経過

### 1. 目的と方法

今回の調査は環境整備に伴う資料作成のために行なったものである。従って、古墳の規模、埴丘築成の状況、外部施設（葺石、埴輪等）、周塗の有無を確認することに主眼をおいた。

その方法も埴丘測量図を基にトレンチを後円部 45° 間隔、くびれ部、前方部側面、前方部両コーナー、前方部正面に設定した。ただ小石塚古墳においては、前方部の損壊が甚だしいのと、調査の結果東側部分だけしか堀状の遺構が検出できなかつたなどの理由で、その確認のためにトレンチを増した所もある。

原状の埴丘には手を付かない方針で行なったので、古墳築造に関しては極力埴丘表面観察に努め、後円部東側裾部と前方部東側面裾部トレンチ内のみに、幅50cm、長さ約1.5mを設け、地面までの観察を行ない、築造過程を知るよう努めた。

### 2. 調査日誌抄

6月25日	小石塚	本日より調査開始。草刈作業。	統の土器と磁器片、角釘片、寛永通宝が出土する。
6月28日	小石塚	草刈作業終る。測量準備。	小石塚 第3トレンチ、第2トレンチ、第6トレンチを掘り下げる。
7月1日	小石塚	地形測量に入る。 大石塚 並行して草刈作業に入る。	小石塚 第2トレンチで堀底らしき面を検出する。第6トレンチで基底面を検出する。上層で埴輪片が出土する。
7月6日	小石塚	地形測量終る。	第12トレンチ（前方部西側コーナー）において、コーナーが明確にできないので東よりに拡張する。
7月7日	大石塚	草刈作業終る。小石塚古墳より基準線を延ばす。トラバース測量用の杭打ち、および計画を行なう。	小石塚 第2トレンチで埴丘面を検出する。
	小石塚	後円部後背と東北部にトレンチを設定し、振り始める。	第7トレンチ（西側くびれ部）で埴丘斜面上に朝顔形埴輪片が出土する。
7月9日	小石塚	第1トレンチでは埴丘盛土の流失が甚だしく同じような土が堆積しているために、埴丘面は現在のところ確定できない。埴丘上に後世の掘り込み穴がかなりあるので、この穴を清掃して盛土の状態を把握するようにする。第3トレンチを後円部北東方向に1.5m×25mで設定する。	小石塚 第2トレンチで埴丘面を検出する。
7月11日	小石塚	第3トレンチにおいて、堀と思われるものを検出する。	小石塚 第10トレンチ（前方部東側コーナー）で形象埴輪片が出土する。第7トレンチ（西側くびれ部）で埴丘斜面上に朝顔形埴輪片が出土する。
	大石塚	地形測量に入る。	小石塚 第2トレンチの埴丘面を清掃し、写真撮影を行なう。第10トレンチ（東側コーナー）で埴丘面を検出し、断面実測、および写真撮影を行なう。
7月13日	小石塚	第3トレンチにおいて堀底面を検出する。空堀と考えられる。大石塚との間に両古墳の関係を知るために、1m×42mのトレンチを設定する。	確認トレンチで、ほぼ地山面を検出するが、堀らしい痕跡はない。
7月14日	大石塚	地形測量を終る。	小石塚 第1トレンチで埴丘面を検出する。第6トレンチで断面実測を行なう。第10トレンチを清掃し、写真撮影を行なう。第7トレンチで埴丘面を検出し、写真撮影を行なう。
7月17日	小石塚	第2トレンチにおいて堀内の堆積土を削除中、第3層より埴輪片、および須恵器片が出土する。第6トレンチ（東側くびれ部）では、焼土塊状の穴を検出する。駄土の粗い土師質系	小石塚 第1トレンチおよび第3トレンチを清掃し、写真撮影を行なう。
	大石塚	調査に入る。前方部東西にトレンチを設定する。後円部北西裾部に	

	トレンチを設定する。後円部北東側部にトレンチを設定する。	8月25日	大石塚 第5トレンチの埴丘面を清掃し、写真撮影および断面実測を行なう。
8月2日	小石塚 各トレンチ内で12.5cmコンタの埴丘測量を始める。	8月29日	大石塚 第5グリッドと第6グリッドのくびれ部2段目テラスで埴輪列を検出する。
8月3日	大石塚 第3トレンチで草石を検出。	9月1日	大石塚 第1トレンチより第7トレンチまで写真撮影、平面実測、断面実測を行なう。
8月4日	小石塚 平板測量を行なう。第7トレンチのくびれ部埴丘面で盛土の観察を行なう。	6日	小石塚 埋め戻し作業を行なう。
8月7日	小石塚 第6トレンチ北部拡張区でくびれ部を明確に検出する。底部で底部穿孔壺形土器が出土する。	9月7日	大石塚 第6グリッドの2段目テラスで埴輪列、および小石数を検出する。第5グリッドの2段目テラスで埴輪列および小石数を検出する。前方部トレンチ内で12.5cmコンタの埴丘測量を行なう。
8月8日	大石塚 1段目斜面の墓石を検出する。小石塚 第6トレンチ、壺形土器の出土状態図を作成し、写真撮影を行なう。作業を完了する。	9月9日	大石塚 第5グリッドの1段目テラスと2段目テラス間の斜面で墓石を検出する。清掃し、写真撮影を行なう。
	大石塚 第8トレンチ（西側部）で埴丘面および埴底面を検出する。第3トレンチ（後円部北西）で埴丘斜面を検出する。第2トレンチで1段目テラスと一基の円筒埴輪を検出する。第7トレンチを西側くびれ部に設定する。	9月10日	大石塚 第6グリッド後円部側くびれ部の2段目テラスで、線刻のある円筒埴輪の破片が出土する。第5グリッドの平面実測を一部開始。1段目テラスで埴輪列、および小石数を検出する。
8月9日	大石塚 第6グリッドで中段と思われるテラス面より、3本1組（中央のものが大きい）の埴輪を検出する。	9月13日	大石塚 第6グリッドの写真撮影を行ない、平面実測に入る。
8月11日	小石塚 第6トレンチ拡張区、埴丘表面、盛土を観察し、平板測量を行なう。大石塚 第4トレンチ東側斜面で草石を検出する。	9月14日	大石塚 第5グリッド、写真撮影。第4トレンチ西側裾部を埋め戻す。
8月13日	大石塚 第4トレンチ西側斜面で1段目斜面、1段目テラス、2段目斜面を検出する。第7トレンチと第2トレンチの斜面掘削部で埴丘面を検出する。第1トレンチで埴丘基底面を検出する。第5グリッドを東側くびれ部に設定する。	9月16日	大石塚 第6グリッドと第5グリッドの平面実測、および12.5cmコンタの埴丘測量を行なう。
8月19日	大石塚 第4トレンチ西側斜面で1段目テラスと円筒埴輪を検出する。第1トレンチで草石を検出する。	9月17日	大石塚 第6グリッドの平面実測を完了する。第5グリッドの埴丘測量を行なう。断面を清掃し、層序を記入する。
8月22日	大石塚 第7トレンチの埴丘下延長部において、濠状の落ち込みを検出する。しかし、基底面よりはずれており、方向もおかしい。第4トレンチ東側斜面の2段目テラスで3本1組の埴輪を検出する。	9月18日	大石塚 第5グリッドおよび第6グリッドの平面図にレベルを記入する。
8月23日	大石塚 第2トレンチの断面に層序を記入する。埴丘面を清掃する。	9月19日	大石塚 第5グリッドの立面図を作成する。
		9月20日	大石塚 第6グリッドの立面図および断面図を作成する。一部並行して埋め戻し作業を始める。
		9月21日	大石塚 第2トレンチ1段目テラスの埴輪を資料として取り上げる。掘方の写真撮影、および実測を行なう。
		9月23日	大石塚 埋め戻し作業を行なう。
		26日	大石塚 調査を終了する。

## V 小石塚古墳

西方にはりだした台地状地形の末端に立地し、南面する前方後円墳で、前方部に向って旧地形も傾斜する。ちょうど大石塚との間で谷地形を呈している。前方部が著しく損壊されているにもかかわらず、幸いにも前方後円墳の原形を復原することができた。

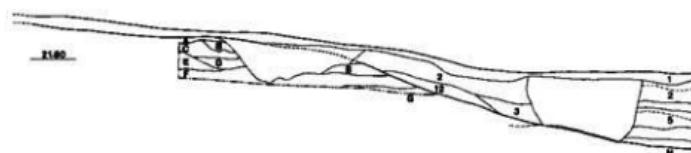
### 1. 墳丘

主軸線はN-13°27'-Eで、規模は全長49m、後円部基底径29m（推定）、前方部幅21m、後円部高3m（現存最高所）、前方部高1.5m（現存最高所）、くびれ部幅14.5m、後円部テラス幅2.5m、後円部中段径16.5mで、後円部墳頂平坦は主軸線より若干西側になる。このことは、旧地形が南西方向にゆるく傾斜していることと関連して、墳丘築造の際、自然地形の制約を受けていることを示している。以下後円部、くびれ部、前方部にわけ、主なトレンチの状況を記していく。

#### (1) 後円部

裾部に4本、段築成の状態を知るために墳丘を横断するトレンチを1本、計5本のトレンチを設定した。

**第1トレンチ** 主軸線に沿った後円部背面裾部に幅1.5m、長さ7.5mのトレンチを設定した。断面観察によると、表土より、墳丘基底面まで1.4mを計り、表土と第2層の上層では現在の瓦礫を多量に混入する廃土となっている。中間層は赤褐色を呈する砂礫および砂質層である。墳丘斜面下層では、黄褐色ないし赤褐色の粘質土で、墳丘盛土の流出土と考えられ、埴輪片が出土する。墳丘基底面は地山を削ってほぼ水平にし、墳丘斜面に沿って地山が上がっていく。基底面直上層は若干暗灰色化しており、空堀状の底の堆積を思わせる。墳丘表面観察の結果、基底面より1段目斜面途中20.8mの高さで灰褐色砂礫土、黄褐色砂礫土の地山で、その上部に赤褐色粘質土の盛土を行なっている。傾斜角は約18°である。

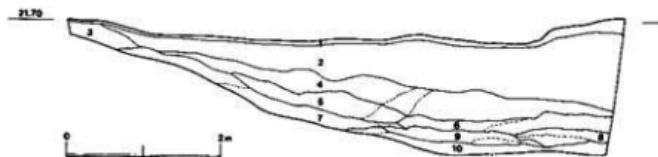


第1層 表土  
第2層 明茶褐色砂礫土層  
第3層 明茶褐色砂質土層  
第4層 赤褐色砂質土層

第5層 灰褐色粘質土層  
第6層 暗茶褐色粘質土層  
第7層 黄褐色粘質土層  
第8層 暗灰色粘質土層

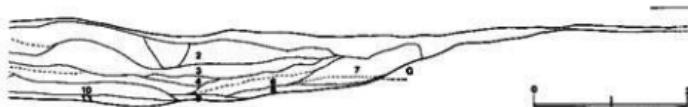
第9層 明茶褐色細砂土層  
第10層 灰茶褐色粘質土層  
第11層 明茶褐色粘質土層  
第12層 灰茶褐色粘質土層

**第3トレンチ** 後円部墳頂より北東方向裾部に地形が凹地を呈することより壙の確認も合わせ幅1.5m、長さ25mのトレンチを設定した。その結果、上部幅約10m、底幅約6m、中央深さ80cmの壙を検出した。壙内堆積土の状態は、上層では茶褐色系統の砂礫および砂質層で、下層は灰褐色および暗灰色を呈し、空壙を想定させる。壙の断面形状はゆるいカーブのカマボコ状を呈し、壙底面中央付近が水平で両方向にやや上がっていく。墳丘表面観察によると、壙底では灰茶褐色粘土（部分的に青灰色）であり、墳丘斜面途中まで黄褐色粘土（ブロックで灰白色粘土を含む）の地山で、その上に赤褐色粘質土の盛土を行なっている。盛土の状態は互層積みによる工法が顕著ではなく、大まかに赤褐色を呈する粘質土を中段テラス付近まで盛っている。傾斜角は約20°である。



第1層 表土	第5層 赤褐色粘質土層	第9層 灰褐色粘質土層
第2層 廃土	第6層 淡赤褐色粘質土層	第10層 黄灰色粘質土層
第3層 黄褐色粘質土層	第7層 暗赤褐色粘質土層	
第4層 褐色土層	第8層 明赤褐色粘質土層	

第4図 第1トレンチ 断面図



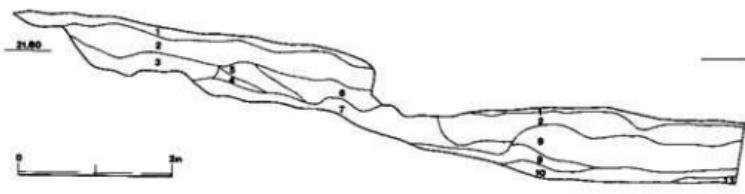
A 赤褐色粘質土層	D 明灰色砂質土層	G 黄褐色粘土層
B 黄茶褐色粘質土層	E 灰褐色粘質土層	H 灰茶褐色粘土層
C 灰褐色粘質土層	F 明赤褐色粘質土層	

第5図 第3トレンチ 断面図

## (2) くびれ部

**第6グリッド 東側くびれ部** 東側くびれ部に極部から上段付近まで幅1.5m、長さ12mのトレンチを設定したが、損壊が甚だしく明確にくびれ部を検出することができなかつたので、北側に幅2m、長さ9.5m拡張した。断面観察の結果、他のトレンチと同様、上層は砂礫および砂質土で、下層は黄褐色ないし赤茶褐色の粘質土で盛土の流出土と考えられる。表土より墳丘基底面まで約1mを計る。墳丘表面観察は(第7図)の通りであるが、このところでも同じように地山を削り出して基底面とし、地山が墳丘面に沿って上がってしていく。墳丘面はかなり損壊している。墳丘基底直上層で埴輪片が出土している。傾斜角は約16°である。

**第7トレンチ 西側くびれ部** 西側くびれ部に幅1.5m、長さ19mのトレンチを設定した。第4トレンチ同様、南側に4m×9mの三角形状に拡張した。断面観察によると、表土より墳丘基底面まで約1.2mを計る。堆積の状態も他のトレンチと同様、上層は砂礫および砂質土で、下層は粘質土でありすべて

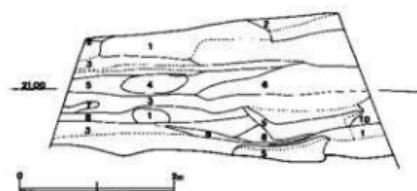


第1層 表土	第5層 淡黄茶褐色砂礫土層	第9層 明赤茶褐色粘質土層
第2層 明茶褐色砂礫土層	第6層 暗茶褐色砂質土層	第10層 暗黄茶褐色砂質土層
第3層 明黄茶褐色砂礫土層	第7層 暗赤茶褐色砂質土層	第11層 暗黄赤褐色粘質土層
第4層 明茶褐色砂質土層	第8層 明黄茶褐色砂質土層	

第6図 第6グリッド 東側くびれ部断面図

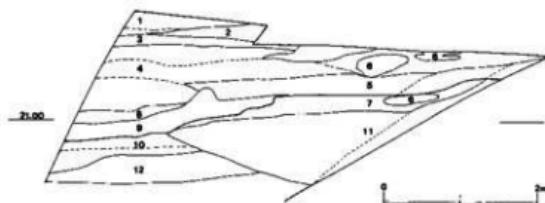


第1層 表土	第4層 淡黄茶褐色砂質土層
第2層 黄褐色砂礫土層	第5層 明黄褐色砂礫土層
第3層 淡黄褐色砂質土層	第6層 黄茶褐色砂質土層



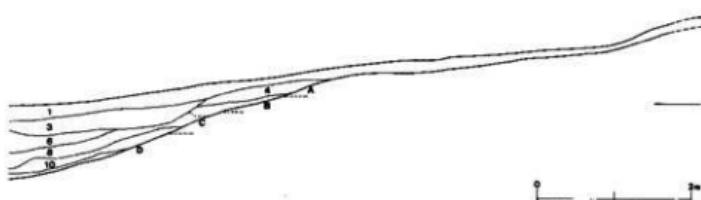
第1層	黄褐色粘質土層	第4層	灰黄褐色砂質土層	第7層	乳赤褐色砂質上層
第2層	黄褐色砂質上層	第5層	乳黄褐色砂質土層	第8層	赤黄褐色砂質土層
第3層	赤褐色砂質土層	第6層	暗赤褐色砂質土層	第9層	灰黄褐色粘砂上層

第7図 第6グリッド 塗丘面観察図



第1層	灰白色粘土層	第5層	暗茶褐色粘土層	第9層	暗赤褐色粘土層
第2層	茶褐色粘土層	第6層	灰褐色土層	第10層	暗黄褐色粘砂上層
第3層	暗黄色粘土層	第7層	赤褐色砂礫土層	第11層	赤黄白色砂質土層
第4層	黑灰色土層	第8層	黄褐色砂質土層	第12層	暗灰色砂質土層

第8図 第7トレンチ 塗丘面観察図



第7層	淡赤茶褐色砂質上層	第10層	赤茶褐色砂質上層
第8層	赤褐色砂質上層	第11層	淡茶褐色砂質土層
第9層	灰色褐色砂質土層		

第9図 第7トレンチ 西側くびれ部断面図



第1層 表土	第4層 灰白色土層	第7層 淡黄褐色土層
第2層 赤褐色粘土層	第5層 黄褐色砂質土層	第8層 喀茶褐色粘土層
第3層 黄褐色土層	第6層 喀黄灰色土層	第9層 攪乱土

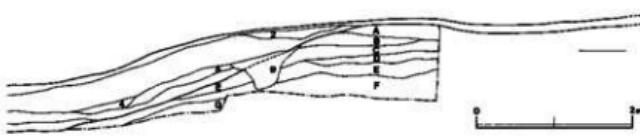
盛土の流出土と考えられる。基底面はほぼ水平で壠状の遺構はなく、地山が墳丘斜面に沿って上がっていく。傾斜角は約25°の立ち上がりである。壠部直上層において、埴輪片が出土する。墳丘表面観察は（第8図）の通りであるが、後円部同様、盛土を行なうに關して大まかな統一および規則は認められるが、細部に至ってはあまり意識していない状態である。

### （3）前方部

**第8トレンチ** 前方部東側面に幅1.5m、長さ21.5mのトレンチを設定した。なお外側肩部に高木があるため、壠の方向がつかめなかったので、北側に長さ4m、幅1mを拡張した。その結果、上部幅約9m、底部幅5.5m、深さ（中央で）50cmの壠を検出した。壠底面はほぼ水平で、両端で上方にゆるく立ち上がりしていく。壠内堆積土の状態は、上層で黄褐色の粘質土であり、底面直上は喀茶褐色粘土層で墳丘斜面と壠底面下層に埴輪片が出土している。墳丘盛土の状態は、青灰色粘土の地山を削り出し、ある程度形を整え墳丘基底部より赤褐色粘質土を盛り、上方に向うに従って厚く盛っていき、よく締めている。墳丘斜面で一部後世の攪乱のため墳丘上部が損壊している。傾斜角は約23°である。

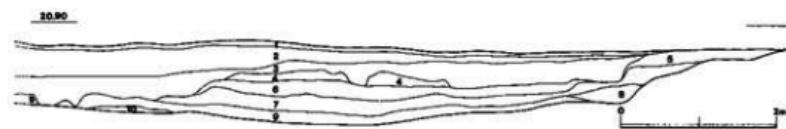
**第9トレンチ** 前方部西側面に幅1.5m、長さ17.5mのトレンチを設定した。表土より基底面までは1mを計る。断面観察の結果、上層がほとんどガラス片、瓦片を含む最近の廃土となっている。旧地形は西方に向ってゆるく傾いていく。流出土はほとんど黄褐色、茶褐色の砂礫および砂質土である。基底面はトレンチ中央付近が一番低く、西側にゆるいスロープをもって上がるが、壠の外側の立ち上がりは検出できなかった。傾斜角度は約20°である。

**第10グリッド** 前方部東側コーナーに幅1.5m、長さ18mのトレンチを設定したが、根塙が甚だしくコーナーの明確なラインと立ち上がりが検出できなかつたため南側に5m×5mを拡張した。また、壠状の遺構確認のために幅1.5m、長さ6mのトレンチを接続させた。その結果、堆積土は表土より基底面まで50cm程で、茶褐色系の砂質土である。墳丘もほとんど盛土を尖なって



A 赤褐色粘土層      D 黄色粘土層      G 地山  
 B 淡黄色粘質土層      E 黄褐色粘土層  
 C 黄褐色粘土層      F 赤褐色粘土層

第10図 第8トレンチ 断面図

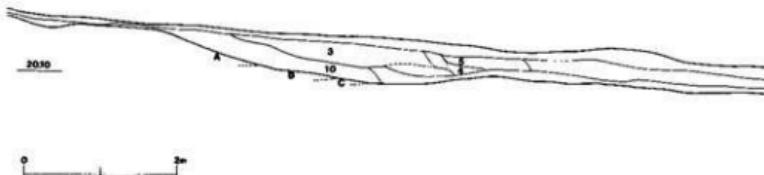


第1層 表土      第5層 黄褐色砂質土層      第9層 灰茶褐色砂質土層  
 第2層 淡黄褐色砂質土層      第6層 暗黄褐色砂質土層      第10層 黄白色砂質土層  
 第3層 淡黄茶褐色砂質土層      第7層 茶褐色砂質土層  
 第4層 黄茶褐色砂質土層      第8層 茶褐色砂砾土層

第11図 第9トレンチ 断面図

いる状態であった。したがって、コーナーの基底ラインがかろうじて認められる程度しか残存していないかった。墳丘表面観察の結果、基底面は青灰色粘土の地山であるが、墳丘面はほとんど赤褐色粘質土の盛土である。第8トレンチ(東側前方側面)で検出した空堀は、このコーナーでは検出できなかった。基底面中央がやや低く、ゆるい弧状断面を幅2m程有するだけで、あとは旧地形に沿って降りていく。したがって、空堀状の遺構は後円部東側で最も幅が広く、東側前方部に向うに従って縮少し、前方部コーナーで消滅する。

第11トレンチ 前方部正面に基準線に沿って大石塚後円部後背面裾部まで幅1.5m、長さ42mのトレンチを大石塚の堀の有無、また築造関係の諸点から設定した。その結果、前方部正面においても堤状の遺構は検出できず、ゆるいカーブで基底面を削り出して、その基底外は旧地形に沿って南方に降りていく。堆積土は、基底面の最も低い所で表土下60cmで、盛土の流出土である。墳丘表面観察においても東西両コーナー同様基底面は地山を削り出しているが、墳丘斜面はほとんど赤褐色の盛土である。堆積土中下層で土師器の細片、須恵器片が出土するが、時期の下るものである。



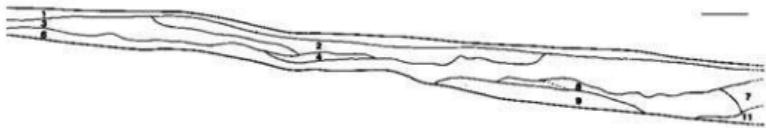
第1層 表土	第4層 暗茶褐色砂質土層	第7層 黄灰褐色砂質土層
第2層 黄褐色砂質土層	第5層 淡黄褐色砂質土層	第8層 明黄灰褐色粘質土層
第3層 明黄茶褐色砂質土層	第6層 黄赤褐色砂質土層	

**第12グリッド** 前方部西側コーナーに幅2m、長さ15mのトレンチを設定した。東側コーナー同様トレンチ内では明確なコーナーが検出しにくかったため、北側と南側に拡張した。また、堀確認のため西側と南側に幅1.5m、長さ7mのトレンチを設定した。その結果、堆積土は表土より基底面まで40cm程しかなく、填丘面の盛上は大部分が流出している。東側コーナー同様、基底面でコーナーの輪郭がかろうじて認められる程度であった。壠状の遺構もなく、旧地形に沿ってゆるく下る状態である。

## 2. 主体部

調査前の状況において、後円部墳頂が主軸に沿って直行する小道のためにかなり削平されていた。腐植土もなく損壊が著しい状態だったので、主体部はすでに消滅してしまっていることを想定させた。しかし、墳頂北側と南側に5cm大の礫が散乱し、もしこれが粘土塁の下部施設の排水用の礫敷であるならば、消滅していくても墓塁の規模ぐらいはわかるのではないかと思われ、表土を削除した。その結果、予想以上に保存状態が良かった。

そこで、棺外遺物はすでに消滅しているものの本体は完全に残っているものと思われたので、粘土をはって若干の盛上を行なって保存した。その規模は墓塁長径7.4m、短径3.1mで、短径の両端が隅丸を成している。埋葬施設は粘土塁で、墓塁の中央に設置されている。内部に外部と同じ土が入っており、被覆粘土上部の墓塁埋土であることがうかがわれる。したがって、棺が腐敗した際に被覆粘土が落ち込み、同じように墓塁埋土も落ち込んだものと思われる。このことにより、棺の規模もだいたい推定される。そこで、検出された平面形での規模と状態を示すと次の通りである。中軸はN-21°-Eである。棺の長さ5.3m、北側の幅75cm、南側の幅55cmで、北側が高く南側との高低差が40cmである。その外側に黄白色の精質の粘土が30cmの幅で残存し、両端だけは広く50cm幅で残存していた。その粘土塁外側の長径は6.3mで、北側、南側とも幅1.3mである。



- |               |           |
|---------------|-----------|
| 第9層 暗黄褐色砂質土層  | A 赤褐色粘質土層 |
| 第10層 淡黄褐色粘質土層 | B 青灰色粘土層  |
| 第11層 黄褐色粘質土層  | C 黄褐色砂質土層 |

第12図 第11トレンチ 断面図

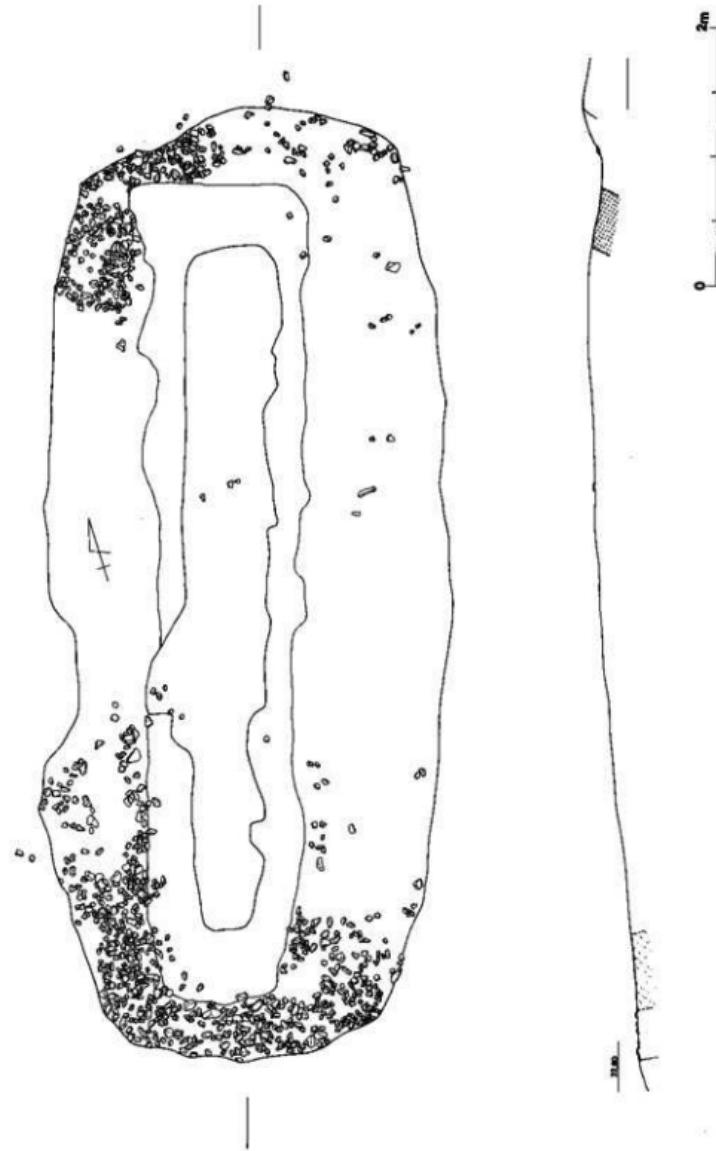
その外側に赤黄褐色砂礫土の墓塗埋土が環の上を覆っている状態であった。

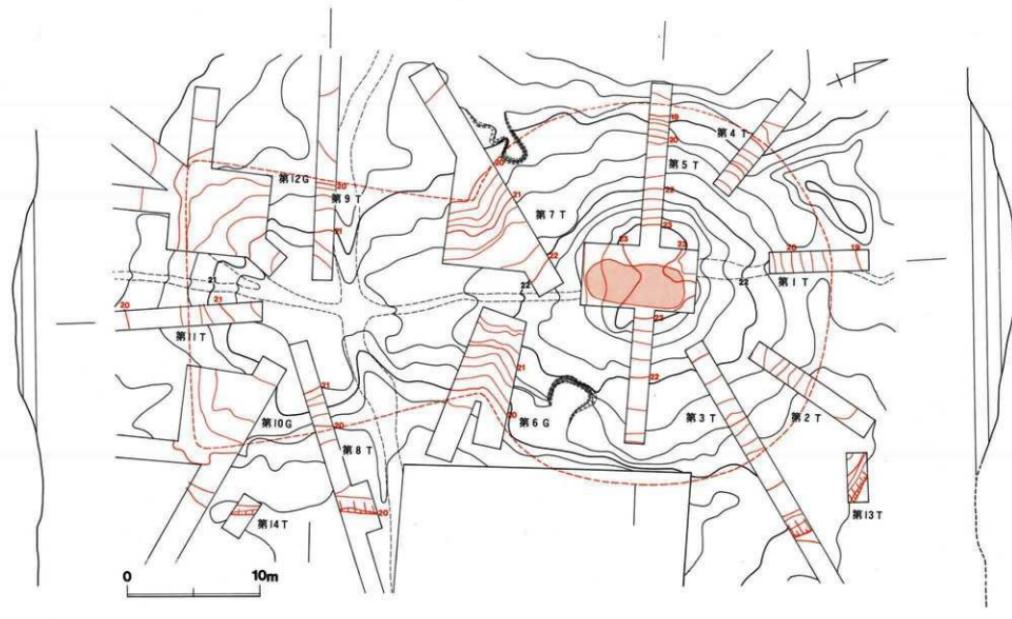
以上の結果を簡単にまとめてみると、

- 外部施設として葺石ではなく、埴輪も原位置を保ったものは一例もなく出土量も少ない。おそらく古墳全体を密に囲繞させるのではなく、何メートルか間隔をおいて立てられたものであろう。
- 底部のない並形土器の破片が、両くびれ部と後内部背面第1トレンチで出土している。このことから、後内部墳頂に円か方形か現在では定かではないが、配置されていた可能性が強い。
- 壇も古墳を全周するのではなく、古墳の東側にだけ設けられたもので、しかも、後内部より前方部に移行するに従って規模も縮少し、東側前方部コーナーで消滅するという特異なものである。ただ、後内部背後と西側は住宅地に入るため不明である。しかし、西側くびれ部においては検出できなかったので、後内部西側で消滅するものとみられる。したがって、壇割的な性格のものと考えられる。
- 古墳築造過程における盛土の状態は、墳丘表面観察の結果によると、ある一定の統一によって、大まかな単位で土を変えて盛っているようである。一部分の断面観察ではあるが、盛土は通常墳丘面外に厚く、中心に薄く盛る手法はみられなかった。したがって、地山を削り出して墳形を造り、その上にやや斜め方向に盛土を行ない整えている。
- テラスも明確にはしがたかったが、東西で若干高低差があり、幅も一定していない。

以上のような古墳築造に関するることは地形的な制約が大きく影響しているものと考えられる。

第13圖 小石塚古墳 主体部平面図





第14図 小石冢古墳 原墳丘測量図

### 3. 出土遺物

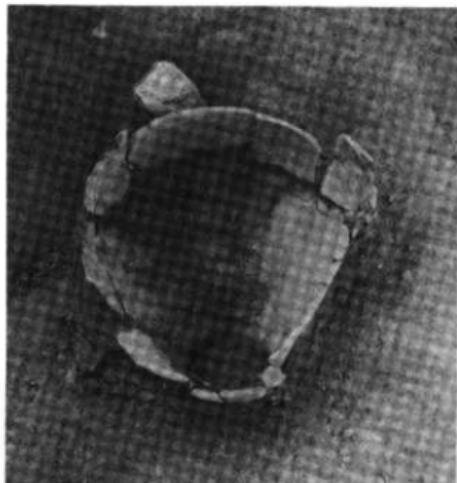
調査の結果、小石塚古墳の墳丘には埴輪の他、特異な形態をもつ壺形土器が埋納されていたことが明らかになった。いずれも原形をとどめるものではなく、数量的にも限られている。以下、比較的残りの良いものを中心に述べることとし、個々について観察表にゆずる。

#### (1) 壺形土器

(第17図 1~3)

いずれも東側くびれ部より検出したものである。出土層位を異なるため、必ずしも同一個体のものとすることはできない。

1. 口縁部で、口径51.4cmを計る。通常の朝顔形埴輪の口縁に類似するが、器壁が極めて薄く、屈折部の下に径8mmの円形の穿孔を有する。胎土は3に近く、壺形土器の口縁と考えて間違いないと思われる。器面の調整は風化のため明らかでない。



第17図 壺形土器出土状況

2. 頭部で径18.2cmを計る。肩部との屈折部に突帯を有しない点で、朝顔形埴輪の頭部とは異なる。器壁はやや厚く、上部へいくほど径を増して広がる。内外面ともに風化のため調整は分かれにくいか、外面の一部にこまかい縦ハケの痕跡を残している。

3. 体部で、全形の約2分の1を残存していた。肩部には張りをもち、下半分は直線にすばまる。底部は成形時よりつくることを意図しなかったものと思われ、直接孔を開けたまま輪積みを行なったと考えられる。外面はこまかいハケメ調整を行なうが、さらに下半部全体をていねいなヘラミガキにより調整している。内面は肩部および下半部をあらいいヘラケズリにより整え、中間部には指頭圧痕による凹凸が顕著に見られる。

#### (2) 墓輪

(第18図 8~10)

8~10 朝顔形埴輪の口縁部である。それぞれやや傾きを異にするが、屈折部を一旦擬口縁にづくり、大きく開く立ち上がり部を接合させたのち突帯を付設している。8は外面を縦ハケ、斜めハケにより調整するが、内面は風化のため分からぬ。

11・12 ともに朝顔形埴輪の頭部である。肩部との境に突帯を有するが、形状を異にし、11は

台形、12は三角形を呈する。また11はやや急角度で立ち上がるのに対し、12は丸みをもつ。器面の調整はともに風化のため分からぬ。

13~15 朝顔形埴輪の肩部から胴部にかけての破片である。14、15は肩部にかなり丸みを帯び、山式の様相をうかがわせる。13は突帯直下に三角形の透孔を有し、突帯はいずれもやや下がりぎみにつく。また15によると外面調整には横ハケ、縦ハケを行ない、内面は横ハケ、指ナデにより整える。器面には赤色顔料の痕跡を残し、黒斑を有する。

16~20 中間段ならびに最下段の破片である。突帯はいずれも下がりぎみにつき、端面はナデにより凹む。透孔は19が三角形で、突帯を境として同一方向に穿つのに対し16はカーブの状態から円形あるいは半円形と見られるものである。器面の調整は外面に縦ハケ、内面に横ハケを残すものが多いが、風化のため詳しく述べられない。18は径が小さく、突帯もシャープさに欠けるため、小石塚古墳出土埴輪の中でも新しい様相を見せるものである。なお、黒斑を器面に残すものが多い。

### (3) その他の出土遺物

#### 須恵器 (第16図 1~5)

5を除くといずれも第13トレンチ第3層(黄褐色砂質土層)より出土したものである。出土状況による限り、これらが古墳に伴うものとは考え難く、後代の流入によるものと思われる。1および5についてのみ述べることとする。

1. 全形の約2分の1を残し、口径12.0cm、器高4.6cmを計る。たちあがりは内傾しながら薄く鋭い口縁端部にいたる。口縁端部にはゆるい凹線がはしる。ヘラケズリの範囲は深く枝をなし、底部には直線のヘラ記号、内面には青海波のタタキを有する。また底部に焼成時のものと思われる<sup>註1</sup>なる杯の一部が付着している。口径はそれほど大きくなく、陶邑古窯址群の資料によるとT K47、<sup>註2</sup>森浩一氏の編年ではI型式の後半に對比され、2~4も同様の時期が考えられる。

5. 第4トレンチ上部擾乱層において出土したので、製の口縁と考えられる。口径24.0cmを計り、口縁端部はやや角張り外面に1条の凹線がはしる。頭部にも2条の凹条を有し、その間にヘラによる粗雑な波状文が刻まれている。やや新しい様相を見せるものである。

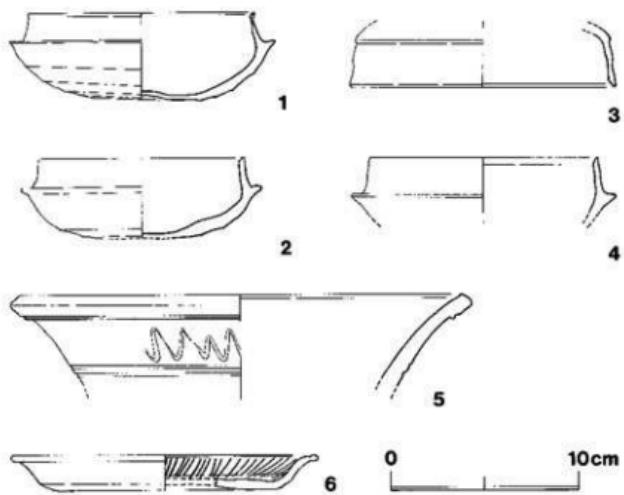
#### 土師器 (第16図 6)

第11トレンチ第2層(黄褐色砂質土層)より出土した。

土師器の體で、口径16.2cm、器高1.8cmを計る。内面にはヘラによる暗文が施され、口縁端部の内側には鋭い凹線を有する。器面はていねいな横ナデにより調整されている。胎土は精良で茶褐色を呈し、焼成は良好である。

(註)

- 平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群」、1966年
- 森 浩一「後期古墳の引論を回顧して」「古代学研究」30、1962年



第16図 須恵器・土器実測図

壺形土器観察表 (第17回)

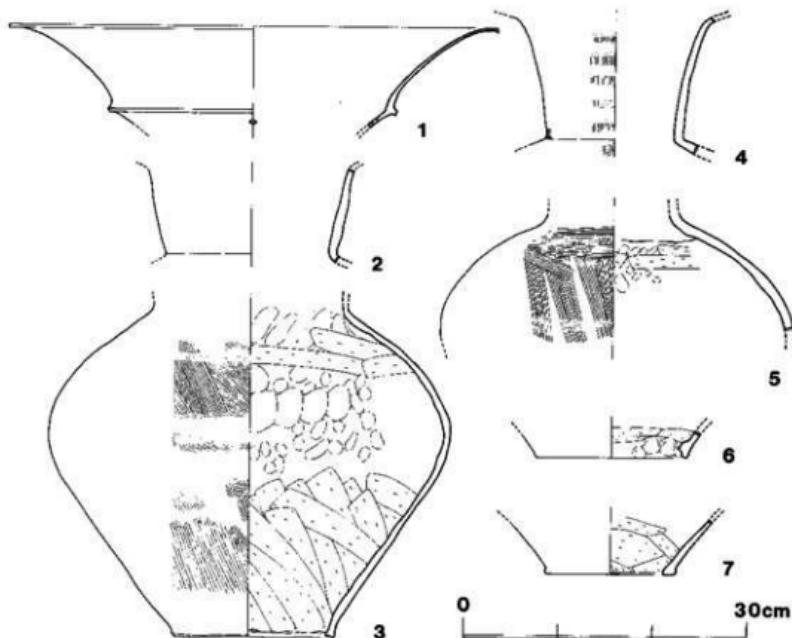
図面番号	写真番号	出土場所	法景(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	図16-3	第6グリッド	口徑51.4	口縁部は大きく外反し、縫部はやや肥厚させる。器壁はきわめて薄い。	表面風化のため調整は不明。突起下に凹孔を有す。	胎土 砂粒多い 焼成 不良 色調 茶褐色
2	図16-2	第6グリッド	頭部径 18.2	上へいくほど開き、中位にやや張りをもつ。	内外面ともに風化のため調整は不明。外面にかかるにハケメの痕跡。	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 淡黄褐色
3	図16-4	第6グリッド	肩部径 42.6 底径17.2	肩部は張りをもち、下部は直面にすばまる。下部は内外に肥厚する。	外面はハケメおよびヘラミガキにより、内面は指痕調整のちヘラケズリ。	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 茶褐色
4	図16-5	第7トレンチ	頭部径 14.4	肩部よりくの字形に肩板して立ち上がり、上へいくほど開く。	腰ハケのもの約2cm肩端で横ナナメを行なう。肩部は斜めハケ、内面は不明。	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 淡黄褐色
5	図16-5	第7トレンチ	肩部径 37.4	肩部は張りをもち	外側は腰ハケののち横ハケ、内面は指痕調整ののちヘラケズリを行なう。	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 茶褐色
6	図16-5	第1トレンチ	底径15.8	縫部は内側に肥厚させ、縫口縁状につくる。	内面は指痕調整ののちヘラケズリ。外側は風化のため不明。	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 茶褐色
7		第7トレンチ	底径13.5	縫部は縫口縁状につくり、上へいくほど直面に開く。	外側はヘラミガキ、内面はヘラケズリを行なう。	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 茶褐色

埴輪観察表 (18回)

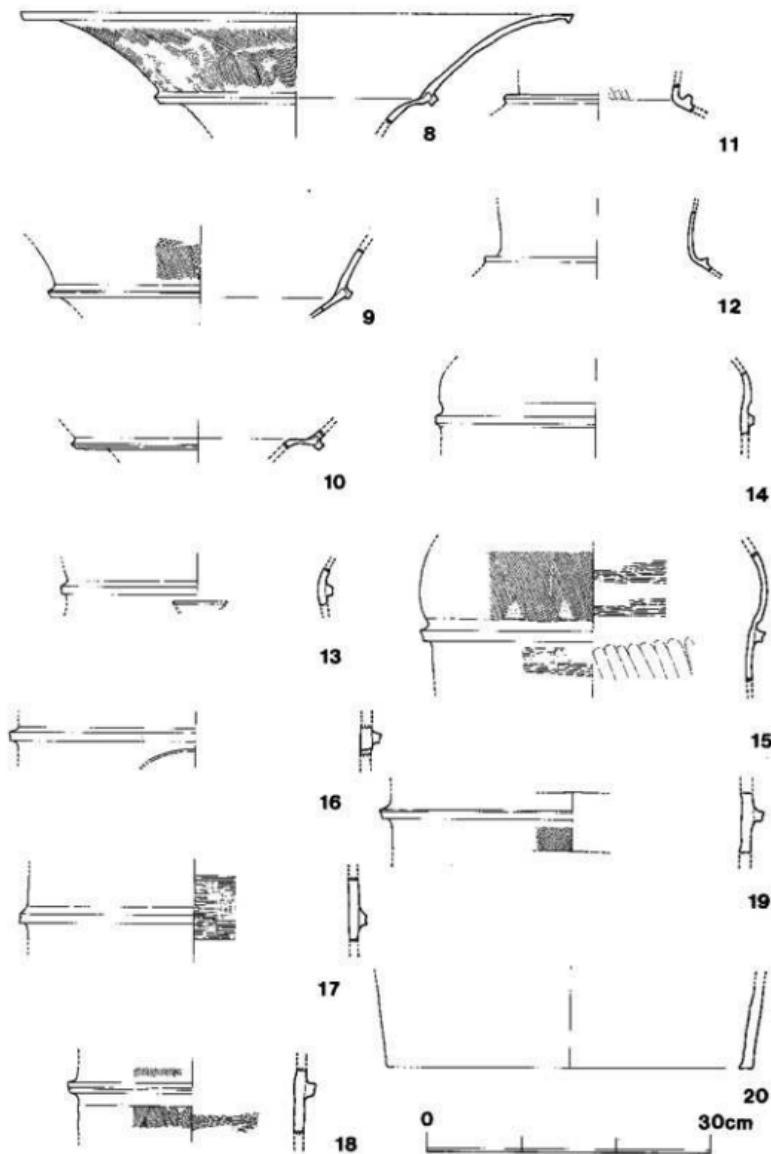
回面番号	写真番号	出土場所	法量(cm)	外観調整	内面調整	造化文等	備考
8	図16-1	第10トレンチ	11径38.4	縦ハケ、斜めハケ	風化のため 不明	△	粘土 砂粒多い 焼成 良好 色調 黄褐色
9	図16-5	第10トレンチ	突 帯 径 32.1	縦ハケ、斜めハケ	風化のため 不明	△	粘土 砂粒多い 焼成 やや不良 色調 黄褐色
10	図16-5	第10トレンチ	突 帯 径 26.8	横ナデ	横ナデ	△	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
11	図16-5	第3トレンチ	頭 部 径 17.0	風化のため不明	ヘラケズリ	△	粘土 砂粒多い 焼成 不良 色調 淡茶褐色
12	図16-5	第5トレンチ	頭 部 径 20.4	風化のため不明	風化のため 不明	△	粘土 砂粒多い 焼成 不良 色調 黄褐色
13	図16-5	第10トレンチ	突 帯 径 28.8	不明	不明	△	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
14	図16-5	第5トレンチ	肩 部 径 33.1	風化のため不明	風化のため 不明	△	粘土 砂粒含む 焼成 不良 色調 黄褐色
15		第5トレンチ	肩 部 径 36.9	肩部は縦ハケ 脚部は横ハケ	横ハケ 指ナデ	△	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黑褐色
16	図16-5	第5トレンチ	突 帯 径 39.5	不明	不明	△	粘土 砂粒多い 焼成 良好 色調 淡黄褐色
17	図16-5	第4トレンチ	突 帯 径 37.0	風化のため不明	横ハケ	△	粘土 砂粒多い 焼成 良好 色調 淡黄褐色
18	図16-5	第4トレンチ	突 帯 径 26.3	縦ハケ	横ハケ	△	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
19	図16-5	第4トレンチ	突 帯 径 40.9	縦ハケ	横ナデ	△ ▽	粘土 砂粒多い 焼成 良好 色調 茶褐色
20	図16-5	第5トレンチ	底径38.9	風化のため不明	風化のため 不明	,	粘土 砂粒多い 焼成 不良 色調 淡黄褐色

須恵器観察表 (第16図)

種類	区画番号	出土場所	法帶(cm)	形 慎 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋杯(身)	1	第13トレンチ	口径12.0 器高4.6	たちあがりは内傾し、続い て口縁端部に続く。受部はや や上方につき出している。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナナ子調整 回転ヘラケズリ%	胎土 密 焼成 良好 色調 灰白色
蓋杯(身)	2	第13トレンチ	推定 口径10.8 器高4.25	たちあがりはやや内傾する。 受部は深く凹み端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナナ子調整 回転ヘラケズリ%	胎土 密 焼成 良好 色調 灰色
杯	3	第13トレンチ	口径14.0	口縁部は全体よりゆるい段 をなして続き、端部は鋸く、回 転がはしる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナナ子調整	胎土 密 焼成 良好 色調 灰色
蓋杯(身)	4	第13トレンチ	口径12.1	たちあがりはやや内傾し、直 に上方へのびる。端部は 鋸い。受部は水平にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナナ子調整	胎土 密 焼成 良好 色調 灰色
鏡	5	第2トレンチ	口径24.0	口縁部は裏面に外反し、端 部はやや角張る。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナナ子調整、回線の間にヘ ラによる波状文をめぐらせる。	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 暗青灰色



第17図 变形土器実測図



第18図 小石塚古墳出土埴輪実測図

## VI 大石塚古墳

小石塚古墳同様、台地状地形からやや突出した独立丘陵の末端に立地し、西方向にゆるく地形が傾斜する。調査前の状況において、葺石、埴輪片などは採集されなかったが、小石塚古墳にくらべて、比較的保存状態のよい古墳であった。調査の結果、だいたいの規模を復原することができた。ただ、前方部が削平され、まして境界外にのびるために全長と前方部幅は不明である。

### 1. 墳丘

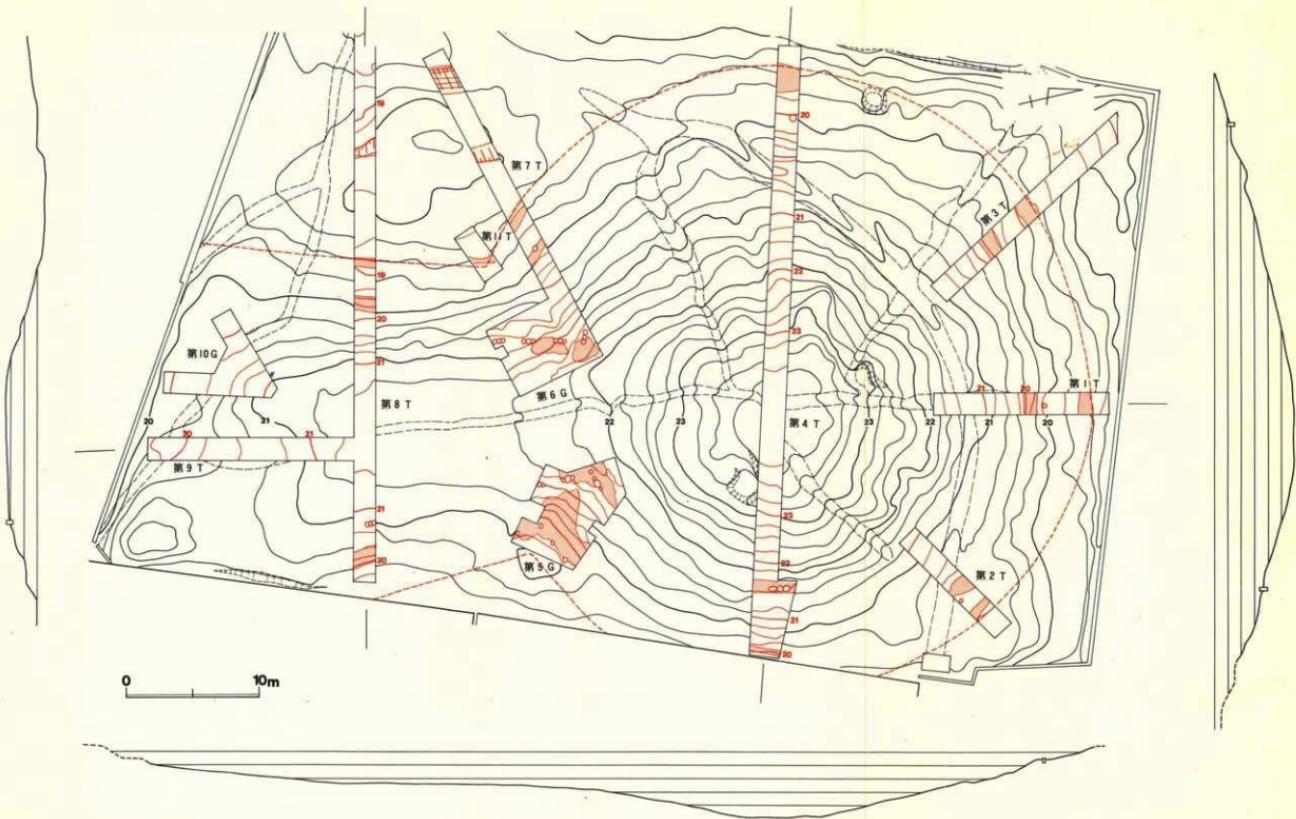
主軸線はN-10°-Eで、後円部三段、前方部も三段築成の南面する前方後円墳である。東高西低という地形的な制約によって、東側と西側では各段に高低差が生じている。後円部径48m（推定）、くびれ部径22m（推定）、後円部高6m（西側基底部より）、前方部高2.8m（西側基底部より）である。以下後円部より、主なトレンチの状況を説明していく。盛土の状態は葺石、埴輪等が残存していたので、表面観察にとどめた。

#### （1）後円部

**第1トレンチ** 後円部後背面裾部に幅1.5m、長さ13mのトレンチを基準線に沿って設定した。堆積土は表土より、墳丘基底面まで約1mを計り、ほとんどが墳丘盛土の流出土である。その色調は黄褐色系で下層より崩落した葺石と埴輪片が出土する。トレンチの北端で基底面を検出した。葺石は大部分が転落したもので、浮いた石を取り除くと原位置を保っている葺石はわずかで、葺石は1段目、2段目とも全く残存していなかった。したがって、墳丘面もかなり損壊しており、テラスも明確にはしがたかった。基底面は黄灰色粘土の地山で18.6mの高さまで上がり、わずかに地山を削って墳丘面として利用していることがうかがわれる。1段目の傾斜角度は25°、斜面の長さ2.2m、3段目テラス面の高さは18.75m、テラス幅は推定2m、2段目の傾斜角度は22°である。葺石は15cm内外の大きさの河原石で、積み方は残存状態が悪かったのではっきりしない。埴輪は1段目テラス面の内側よりに1基の原位置を保っている円筒形埴輪を検出した。それによると80cm前後の掘り方に径40cmぐらいの円筒形埴輪をすえ、外側に淡茶褐色砂質土の入れ土を行なっている。埴輪は1段目尖端付近まで埋めている。埴輪の間隔を知るために東側に1m×0.7mのトレンチを設定した。その結果、1.5mぐらいの間隔で配置されていることがうかがわれる。

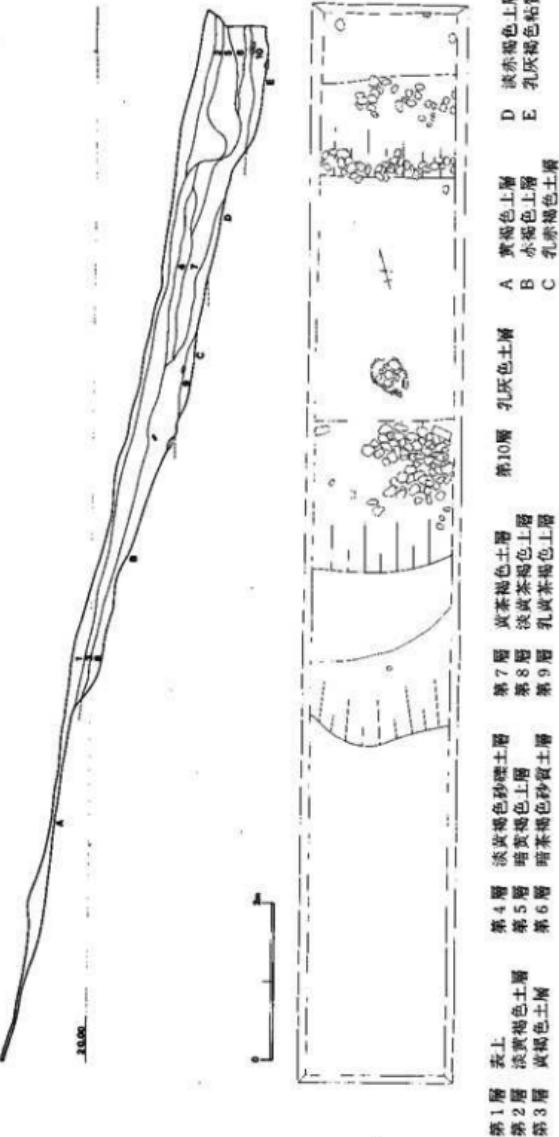
**第2トレンチ** 後円部北東方向裾に幅1.5m、長さ10mのトレンチを設定した。断面観察によると墳丘側では表土より20cmで、1層の黄褐色砂礫土をはさんで墳丘面を検出するが、基底部側では表土より約1.3mで基底面を検出する。その堆積土は上層で瓦礫、ゴミ等の廃土を多量に混入する表土層であり、その表面から切り込みの土塹がある。その下層は墳丘側からの流出土である。下層より埴輪片、および崩落した葺石が混入する。基底面、1段目斜面、および1段目テラスを検出した。1段目傾斜角度は23°、斜面の長さ1m、1段目テラス面の高さは19.75m、テラス幅1.5m（推定）である。葺石は崩落しているものが大部分で、1段目斜面、2段目斜面と





第19図 大石塚古墳 原墳丘測量図

も原位置を保っているものは少なく、ほとんどずり落ちかけて固まっている状態であった。したがって、各段とも基石は残存していなかった。葺石の大きさは約20cm前後のものと、10cm前後のものが混在している。葺石の葺き方は、1段目斜面でみると地山の上に砂礫を含む暗茶褐色の盛土を約20cmほど行ない、その上に小口積みの状態で積んでいる。1段目テラス面まで地山を削って利用しているが、2段目斜面から盛土である。1段目テラス面は地山を内側ほど深く掘って凹地を作り、その上に1段目斜面と同様、暗茶褐色の砂礫土を内側で約20cm、外縁付近で約10cm前後の盛土を行なっている。このことは盛土の流出を防ぐ意味があるものと思われる。埴輪は1段目テラス面の内側よりに1基の円筒形埴輪を検出した。埴輪の振り方は径約50cm、深さ22

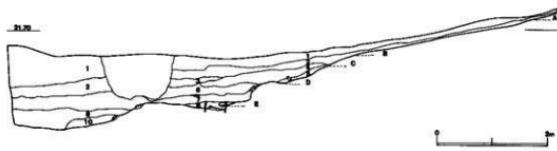


第20図 第1トレンチ 断面図・平面図

cmで中央を盛り上げる断面凸レンズ状に掘り、埴輪を立てている。埴輪の径は約38cmで、1段目突堤まで埋めている。

**第3トレンチ** 後円部の北西方向裾部に幅1.5m、長さ18mのトレンチを設定した。堆積土は墳丘基底面で表土より約1.2mを計る。上層は盛土の出土であるが、墳丘基底部より外方4m付近は、地山面直上層より瓦器片、土師器片、磁器片が出土する。遺構は検出できなかったが、その時期以降に手を加えられている可能性があり、それ以後に二次堆積していたものと考えられる。基底部より外方10mまでトレンチが延びているが、堀は検出できなかった。基底面は淡灰色の砂質土の地山で外方にゆるく下降していく。基底は円弧を描く状態ではなく、かなり損壊し1段目、2段目と同様にかなり盛土を流失していた。したがって、1段目テラスも残存状態が悪く外端を流失し、平坦面は30cmほどの幅しか残存していなかった。1段目斜面下半で20~25cm内外の扁平な板石を用いているのは、このトレンチだけであり、2段目斜面においても河原石の葺石と板石が混在していた。葺石はほとんど剥落しており、残存しているものでも動いている可能性が強い。基底面の高さ18.6m、2段目テラスの高さ19.25mである。埴輪は1段目テラス面では検出できなかった。

**第4トレンチ** 後円部の段築成の状態を知るために幅1.5mで埴丘を横断するトレンチを設定した。西側斜面においては、墳丘斜面の損壊が甚だしく、基底面より2段目斜面途中までしか明らかにできなかった。しかし、東側斜面においては2段目テラス面と2段目斜面下縁付近まで検出できた。1段目テラス面は境界外に入り、現在鉄筋コンクリートの建物がたっており破壊されている可能性が強い。したがって、検出した西側裾部と東側2段目テラス面について記す。西側裾部では表土より基底面まで約1.5mを計り、そのほとんどが埴丘盛土の出土である。埴輪片は各層から出土する。基底面は灰茶褐色粘土の地山を削って平坦にしているが、1段目斜面下半の葺石の残存状態がよかつたため、どこまで地山を利用しているかははっきりしない。しかし、1段目斜面上半の葺石が崩落しているため、その直下の層をみると赤褐色の粘質上で、明らかに盛土であることが判明したので、墳丘裾部で若干地山を削り出して利用していることがうかがえる。基底面の高さは約18m、1段目斜面葺石の傾斜角度は20°、斜面の長さ約3m、1段目テラスの高さ約19.2m、テラス幅1.6m（推定）である。2段目斜面の葺石はすべて崩落して残存していないかったが、同じ厚さの盛土を行なって葺いていたとみる場合、その直下の面の傾斜角度は25°~30°である。おそらく2段目テラスと考えられる面は最近まで道として利用されていたため、損壊が著しく凹地を成しているが、参考として2段目斜面の長さを推定すると約3.2mである。葺石は1段目上半、2段目とも崩落して残存していないかったが、1段目下半においては比較的良好に残存していた。その状況からみると、径10cm~15cmぐらいのものを中心に小口積みの状態に積んでいるが、たまに20cmぐらいのものが斜め方向に積まれている。見方によっては三角形状を呈するよりもとれるが、しかしこれが葺石を葺く場合の画線の単位となりうるかは、この状況からだけでは断定できない。1段目の基石は残存していないかった。表込めの土は暗黄褐色の砂質

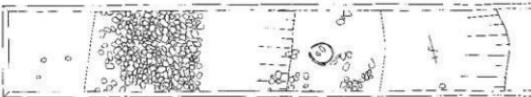
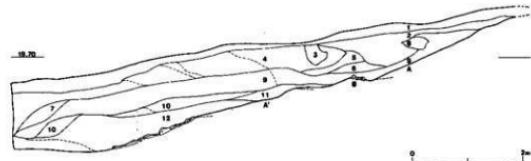


第1層 表土  
第2層 暗黄褐色砂礫土層  
第3層 黃褐色砂礫土層  
第4層 黃褐色砂質土層  
第5層 單黃褐色砂質土層

第6層 黃褐色砂質土層  
第7層 黃茶褐色砂礫土層  
第8層 青褐色灰褐色砂質土層  
第9層 明灰褐色砂質土層  
第10層 單黃褐色砂質土層

A 黃褐色土層  
B 赤褐色土層  
C 乳赤褐色土層  
D 淡赤褐色土層  
E 乳灰褐色粘土層

第21図 第2トレンチ 断面図・平面図



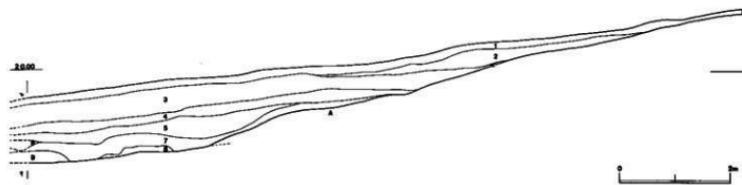
第1層 表土  
第2層 暗茶褐色土層  
第3層 黃褐色土層  
第4層 暗灰褐色土層  
第5層

第6層 暗茶褐色砂礫土層  
第7層 暗灰色土層  
第8層 黃褐色砂質土層  
第9層 淡黃褐色土層  
第10層 茶褐色土層

第11層 暗茶褐色土層  
第12層 黃茶褐色土層

A 赤褐色土層  
B 乳灰褐色土層

第23図 第4トレンチ西側部分 断面図・平面図



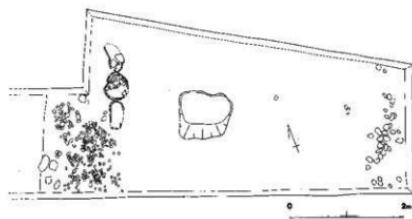
第1層 表土  
第2層 暗黃褐色砂礫土層  
第3層 明黃褐色土層

第4層 黃褐色砂礫土層  
第5層 乳灰褐色砂質土層  
第6層 乳黃褐色砂質土層

第7層 黃褐色土層  
第8層 乳灰褐色土層  
第9層 乳黃褐色土層

A 赤褐色土層

第22図 第3トレンチ 断面図・平面図



第24図 第4トレンチ東側部分 平面図

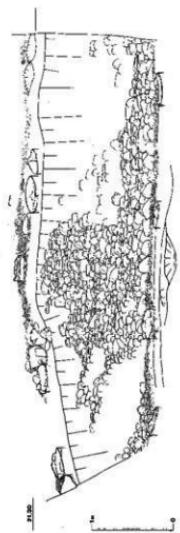
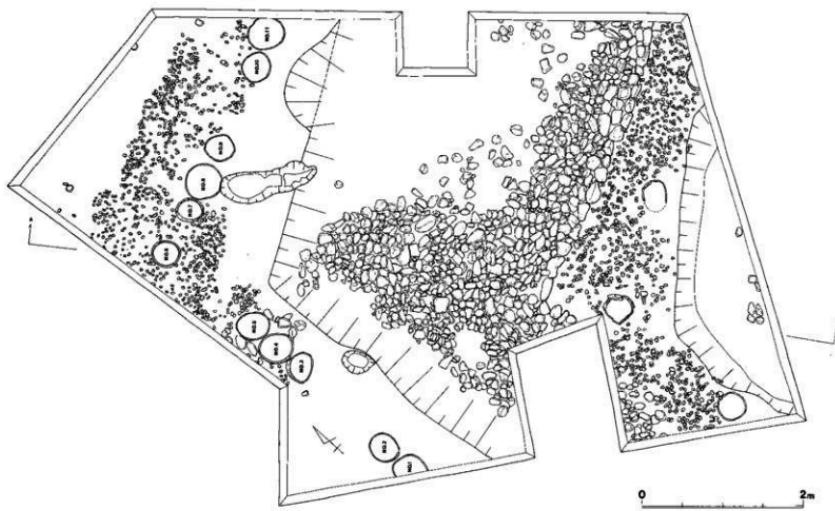
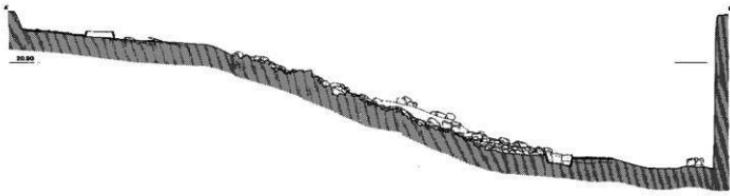


図25 四面十平面・ドリッピング面図

土を用い、それほど厚くは存じていなかった。埴輪は1段目テラス面内側より原位置を保ち、基底部だけを残存する1基の円筒形埴輪を検出した。掘り方は他と同様50cm内外の円形のもので、中央を高く断面凸レンズ状に掘ってあった。埴輪の径は約38cmで1段目突堤まで埋めてあった。盛土は表面観察によると、1段目斜面、2段目斜面とも赤褐色粘質土であったが、1段目テラス面は淡灰褐色粘質土である。テラス面を築成する際に、この部分だけに二次的な盛土を行なったのか、墳丘築造の際の盛土なのかは墳丘を立ち割っていないので判断しにくい。

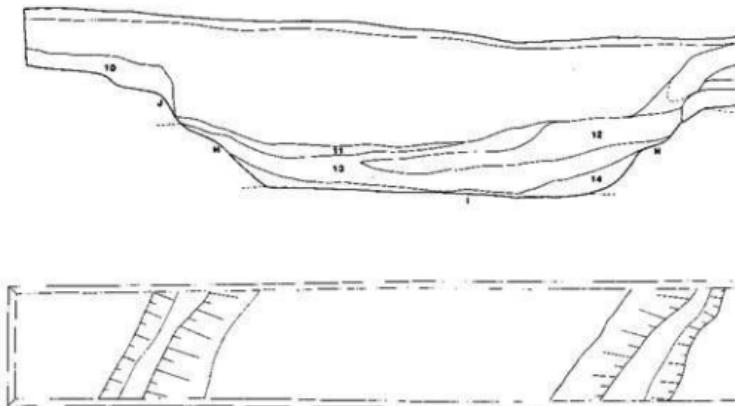
東側墳丘斜面において、2段目テラス面を検出したが、保存状態が良好でなくテラス面外端も損壊していた。3段目斜面も葺石は崩落しており、わずかに基石と考えられるものが1基残存していた。2段目斜面は損壊が甚だしく、後世の土塁によって墳丘面は削られ、下縁も境界のコンクリートや塀によって削除され、その直上に崩落した葺石が存在していた。2段目テラス面は約1mの幅で残存しており、このテラスで内側よりに小石を敷いている面を検出した。径5cm内外のものを、おそらくテラス面全体に敷きつめていたものと考えられる。埴輪はテラスの外側よりも3本一組で検出した。この埴輪組は中央が径45cmの円形で、両側が長径約54cm、短径約28cmの隋円形で基部だけが残存していた。掘り方は長径1.75m、短径中央で0.6m、両側で0.4mである。埴輪の樹立と小石敷との工程順序は、まず築成したテラス面に埴輪を立て、その上に小石を敷いていることがうかがえる。

## (2) くびれ部

**第5グリッド** 東側くびれ部と思われるところに墳丘斜面に沿って、幅5m、長さ6mのトレンチを設定した。2段目テラスにおいて、後円部と前方部の接合地点が検出できなかつたため、上方を三角形状に幅4m、高さ3m拡張した。堆積土はトレンチ下壁南北断面でみると1.4mあり、上層は旧表土の上に40cm盛られた最近の廃土である。堆積の状況は中間層で各層が2~3cm間隔の砂状で堆積しており、流出の状況をうかがい知ることができる。中間層下方では焼土、炭がブロック状に入り、転石、埴輪片も混在する。下層は暗赤黄褐色の粘質土が遺構面を覆っている。1段目テラス、2段目斜面、2段目テラスを良好に検出することができた。1段目斜面より1段目テラス外端付近は損壊が甚だしく、葺石も残存していない原墳丘面を検出することができなかつた。しかし、トレンチ下壁中央の凹地底面で黄灰色粘土の地山を検出した。したがつて、旧地形をどこまで利用しているかは不明であるが、表面で見るかぎり1段目テラスより上方はすべて盛土である。凹地底面の高さ19.55m、1段目テラスの高さ、くびれ部の交点で19.9m、後円部側19.84m、前方部側19.95mで若干後円部側が低い。これが後円部第2トレンチ1段目テラスにいくと高さ19.60mで30cmの差であり、徐々にではあるが後円部側に下がっていく。1段目テラスの幅は1.6m残存していたが、外端が崩れていて、もう少し広くなるものと考えられる。2段目斜面の傾斜角度は約22°、斜面長4.2m、2段目テラスの高さ約21mであり前方部に向かってゆるく傾斜している。テラスの幅は3段目の基石が崩落して残存していないが、小石敷の範囲で推定すると2m弱になるものと考えられる。1段目テラスと2段目テラス面では、径5cm内外

の小石を密に敷きつめている。葺石は2段目斜面において、後円部側上半は崩落しているものの良好な状態で検出した。それによると、基石列は径約20~25cmで、他の葺石と比べて大きめの石を横方向に小口積みにして並べてあり、その上方は15cm内外の石を乱れてはいるが小口積みの状態で積んでいる。まれに25cm内外の石が混在するが、一線を区画するような状況ではない。また、前方部と後円部の境を区別するような明瞭な石も認められない。ただ、基石列において、0.9~1m間隔で基石がずれていることが気にかかる。もし動いていないと見た場合、葺石を肆く際の単位になる可能性が考えられるが、その上方において頻繁に認められない。参考までに平面図(第25図)によると、このずれがゆるく円弧を描いているようにも見える。裏込めの土は暗黄褐色の砂質土を用い、それほど厚くは盛られてはいなかった。埴輪は1段目テラスと2段目テラス面で検出した。1段目テラス面の埴輪は、テラスの中央付近に径35cm内外の円筒形埴輪を1段目突帯まで埋め、約1.5mの間隔で配置している。ただNo.1(平面図参照)とNo.2との間隔だけ1.8mである。2段目テラス面においては、第4トレンチ東側2段目テラス同様3本一组で配置している。テラス面の中央より、若干外側に立て1段目突帯まで埋めている。3本一组の埴輪の径は中央のものが約45cmで両側が約32cmの円筒形埴輪である。配置の間隔は各組で多少違うが中央間で約1.8

20.70

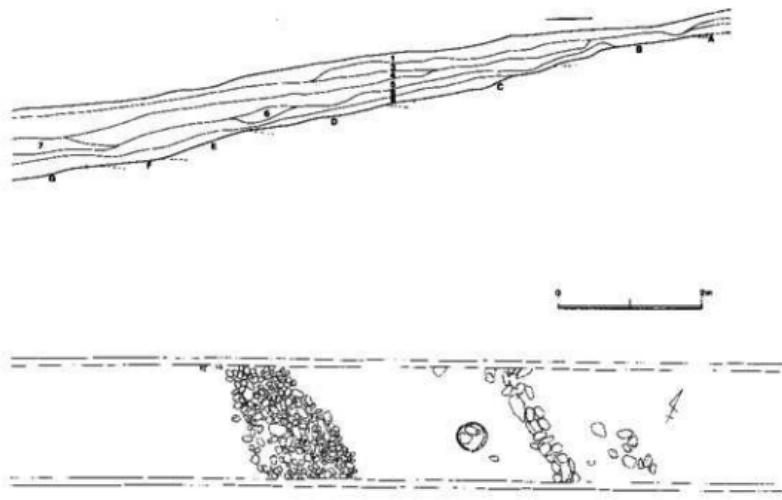


第1層 表土  
第2層 赤褐色砂質土層  
第3層 明黄褐色礫混合土層  
第4層 黄褐色砂質土層  
第5層 赤黄褐色砂質土層

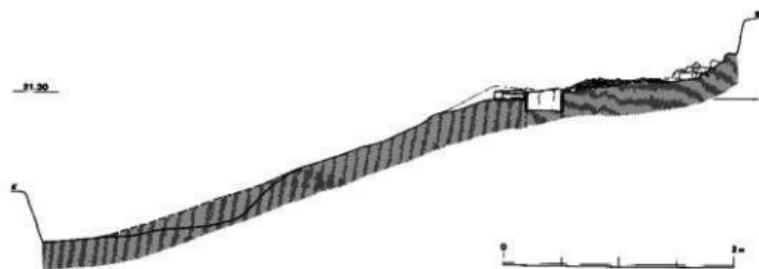
第5層 暗黄褐色砂礫土層  
第6層 黄褐色砂質土層  
第7層 暗黄褐色砂質土層  
第9層 黄灰褐色粘質土層  
第10層 黄灰褐色礫混砂質土層

~2mで各組の端間は1m前後を意識している。ただ後円部と前方部の交点の埴輪は1本で、配置にずれが生じている。このことは、埴輪を樹立する際、後円部側ではこの箇所より始められたのではなく、同段の西側くびれ部の埴輪が整然としているので、西側くびれ部に1つの始点があるものと考えられる。したがって、東側くびれ部に配置してきた場合、間隔が合わなくなり、(No.9とNo.10が0.7m、No.6とNo.7が0.3mの間隔)このような状態になったものと想定される。

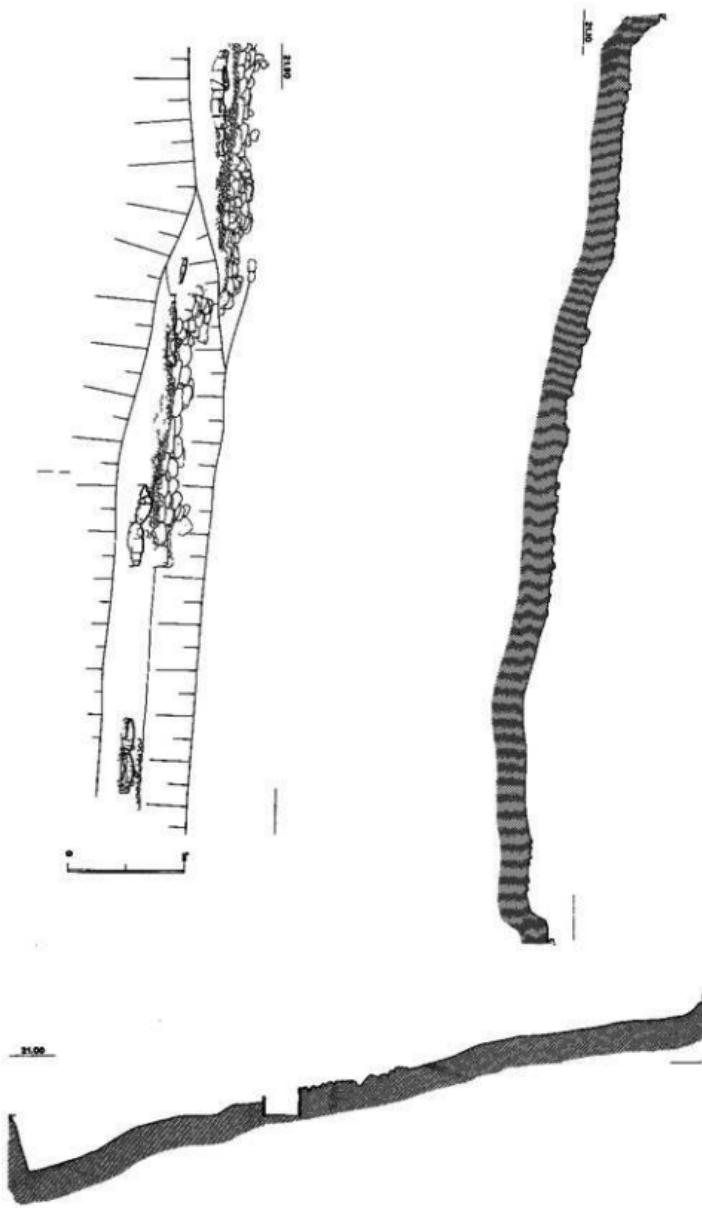
**第6グリッド** 西側くびれ部上方に幅7m、長さ5mを設定したが、裾部にかけて高木があるため後円部側に避けて、柵の確認と段築成の状態を知るために幅1.5m、長さ20mを北側で接続した。くびれ基底部は高木を避け幅1.5m長さ4mの補助的なトレンチを設けて確認した。記述の便宜上、裾部より記していく。墳丘基底部より外方2mにおいて上方幅8m、底幅4.6m、肩部の高さ、墳丘側18m、外側18.5m、底16.8mで外側がやや高く、地山を掘り込んで造っている塗状遺構を検出した。塗内の堆積は断面観察によると表土より約1.7mまで瓦礫、コンクリートを含む近年の廃土で、その下層約70cmが自然堆積土である。最下層は青灰色粘土で、その上層にシルト状の黒灰色粘土が堆積しており、この層に墳丘盛土の流出土が入り込む。また明らかに、水がたまっていた痕跡を示している。この塗状遺構は墳丘基底部より外方に掘られ、同じく前方部



第26図 第7トレント 断面図・平面図



第27図 第6グリッド 平面図・立面図



第28図 第6グリッド 断面図・立面図

に設けたトレーニングでは5~6mしか離れていないにもかかわらず、空堀状の堀しか確認できなく、この堀が古墳に伴なうことは明らかであるが、濠状遺構との高低差、方向の違いなどから関連は認められない。また濠状遺構を後円部北側に延ばしても約5mで堀部にあたる。このようなことから古墳との関連性は薄いが、もし古墳に伴なうものとした場合、くびれ部外側に特別な施設を設け、その周囲をさらに掘り下げている可能性も考えられる。しかし、このトレーニングだけの判断では確証できない。墳丘側は基底部より2段目テラスまで、かなり崩れているものと検出することができた。それによると、墳丘基底面は青灰色の地山で外方にゆるく傾く。基底部の高さ18.3m、1段目斜面の傾斜角度20°、斜面長2.5m（推定復原）、1段目テラス高19.25m、テラス幅2.2m（推定復原）、2段目斜面の傾斜角度20°弱（推定復原）、斜面長6.5m（推定復原）、2段目テラス高21.40m、テラス幅約2.2m（推定復原）。葺石は1段目斜面下半と2段目斜面基石列のみ残存し、他は崩落して、盛土もかなり流失し、2段目斜面上半においては損壊が著しい。1段目斜面の葺石は10cm内外のものを用い、たまに25cmぐらいのものが混じるが、積み方に規則性はうかがえなく雑然としている。2段目斜面の基石列は大きい石を用いている。1段目テラス面は内側が高く、外端が少し下がる。2段目テラス面において、東側くびれ部同様5cm内外の小石を敷きつめているが、後円部より前方部に移行する際に高低差が生じている。後円部側の高さ21.4m、前方部側No.5（平面図参照）埴輪付近約21m、No.10埴輪付近20.7m、後円部側と40cmの段差（傾斜角20°）をもって接続し、あとはゆるいスロープで前方部に統く。東側くびれ部と比較した場合、後円部側ではほぼ同じ高さであるが、前方部側では約35cm低い。2段目テラス内側コーナーにおいて、3段目斜面葺石の基石列を後円部側に6.6m、前方部側に2m検出した。約25cmの大きめの石を横方向に並べてあり、後円部側と石の積む方向を変えコーナーを明確にしてある。内角は約100°である。しかし、前方部に基石列をのばした場合、段差下で検出した基石列と合わず、後円部側テラスが内側に入り込む状態になっている。スロープ部分の葺石が崩落しているため、接合関係は定かでない。段差下で検出した3段目斜面葺石は2.2mの基石部分だけ残存し、他は崩落している。長径30~40cm前後の大きさの石を横方向にして、広い平坦な面を表面にしている。一見すると、石垣積みの状態である。基石列の方向は前述したように、コーナーの列と約50cmずれがあり合わないが、それにもまして段差下の部分では90°基石が外側に屈折し、あたかもテラス面を横断して後円部2段目斜面に接続するような感じさえ受ける。斜面上半部の葺石が崩落していて、上段とのつながりは明確ではないが、段差の所でテラス幅が局部的に狭められていることは事実である。埴輪は1段目テラス面内側により基底部を残す1基の円筒形埴輪を検出した。径は約38cmで1段目突堤まで埋めている。2段目テラス面の埴輪は東側くびれ部同様、3本一組で配置している。ここでは東側くびれ部のような修整はなく、後円部側一組の内側（No.3）と前方部埴輪列がほぼ90°の角度で並べられている。各組の埴輪の径は中央約45cm、両側約32cm、各組の間隔は約1m強で配置されている。くびれ部と思われる所に設定したトレーニングでは、堀部から1段目テラスと考えられる所まで

検出したが損壊が激しく、1段目斜面の葺石も残存状態が悪かった。基底面は黄灰色の地山でゆるく外方に傾斜し、墳丘立ち上がりも明確にはできない。

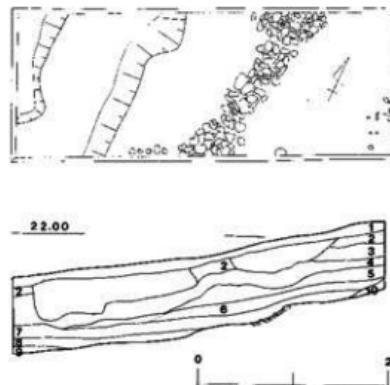
1段目斜面の葺石は、径10cm内外の小さいものが用いられ、北壁付近でわずかに後円部側に移行する。基底部の高さ約18.70mである。

### (3) 前方部

**第8トレンチ** 前方部の段築成の状態と堀の確認のために横断するトレンチを幅1.5m、長さ47mで設定した。その結果、東側面においては1段目テラス、2段目斜面葺石、2段目テラス埴輪列を、西側面では堀より3段目墳頂まで検出できた。便宜上、東側面と西側面に分けて記述する。

西側墳丘基底部で検出した堀は上部幅約9m、底部約7m、底は平坦で外側よりにゆるく傾き、深さは中央で60cm弱である。堆積の状況は基底部よりで約80cm、外側よりで約70cm、中央で約60cmである。堆積土は向側からの流出土であるが、墳丘側からの流れ込みが顕著である。基底面は青灰色粘土の地山で高さ18.55m、1段目斜面の傾斜角度約30°、斜面長約1.4m、1段目テラス高19.30m、テラス幅1.6m（推定復原）、2段目斜面の傾斜角度約28°、斜面長1.2m（推定復原）、2段目テラス高20.20m、テラス幅1.4m（推定復原）、3段目斜面の傾斜角度24°（推定復原）、斜面長2.7m、墳頂高21.30mである。各段とも盛土の流失が激しく、したがって、テラス面の残存状態も悪く、葺石もほとんど崩落していた。そのうちでも、1段目斜面の葺石は残存度の良い方であった。それによると、径10cm内外の小さいものが用いられ、裏込めの土はそれほど厚くなく、暗茶褐色の小砂利を多く含む砂質土である。2段目斜面の葺石は基石列の一部を検出したのみで、他はすべて崩落している。基石は径約25cmのものを横方向に並べている。埴輪は流出土の下層より転石とともに破片で出土するが、原位置を保ったものは検出できなかった。

東側面においては前述のように1段目テラス面と2段目斜面葺石、2段目テラス埴輪列を検出した。1段目テラスは境界に近いため、すべての面を検出することができなかった。この面で埴輪片が固まって出土したが、原位置を保っている状態ではなかった。1段目テラス高約19.9mである。2段目斜面において下半部で葺石を検出することができたが、その中でも南壁側は、すり落ちかけて原位置を保った状態ではない。基石は検出できなく、上半部は崩落している。葺石は



第29図 第11トレンチ 断面図・平面図

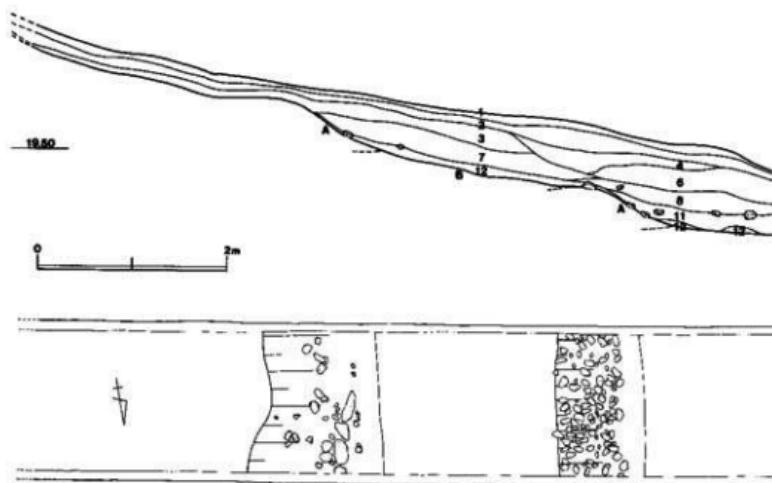
第1層	表土	第6層	黄褐色砂屑
第2層	黄褐色砂礫層	第7層	黄褐色粘質土層
第3層	黄褐色砂質土層	第8層	黄灰褐色砂質土層
第4層	黄褐色砂層	第9層	黄褐色砂層
第5層	暗黄褐色砂層	第10層	淡黄褐色粘質土層

第29図 第11トレンチ 断面図・平面図

径10cm内外のものと15cm内外のものが混在している。傾斜角度約24°（推定復原）、斜面長2.4m（推定復原）、2段目テラス高20.90m、テラス幅約1.4m（推定復原）である。2段目テラスで3本一組の埴輪を検出した。くびれ部2段目テラスで検出したものと同様、径も中央のものが大きく両側が小さい円筒形埴輪である。損壊が著しく基底部を約5cmほどしか残していなかった。したがって、埴輪の検出によってテラス面と推定されたほどである。3段目は2段目テラスよりゆるいスロープで墳頂にいたる。墳頂面は残存高21.30mで高低差40cmにすぎないが、2段目テラス埴輪列の存在、墳頂を平坦に、しかも水平にするということを意識していると考えることより西側面同様、3段築成にしていると推定される。3段目斜面はかなり損壊しているため、墳頂の幅、3段目斜面の傾斜角度、斜面長を推定することは困難である。

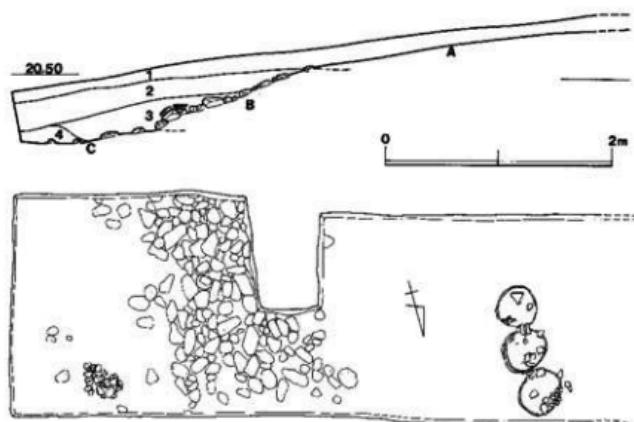
**第9トレーニー、第10グリッド** 前方部正面と西側コーナーに設定したが、損壊が甚だしくすでに削平されていて検出することができなかつた。

- 以上の結果、確認したことを簡単にまとめてみると、
- 墳丘築造の際、地山の利用は第2トレーニー1段目テラスで確認したのみで、他のトレーニーでは基底面だけである。
  - 西側くびれ部2段目テラスで後円部より前方部に移行する際に約40cmの段差をもって接続する。東側くびれ部においてはスムーズに移行するのに西側のみこのようになることは東高西低といふ



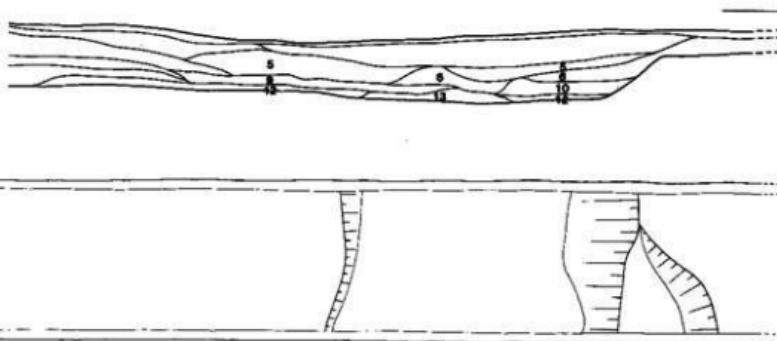
**第30図**  
**第8トレーニー西側部分 断面図・平面図**

第1層	表土	第4層	茶褐色砂質土層
第2層	茶褐色砂礫土層	第5層	暗茶褐色土層
第3層	黄褐色砂質土層	第6層	暗茶褐色砂質土層



第1層 表土	第4層 暗茶褐色粘質土層	A 黄褐色粘質土層
第2層 暗茶褐色砂質土層		B 暗茶褐色砂質土層
第3層 茶褐色砂質土層		C 茶褐色粘質土層

第31図 第8トレンチ東側部分 断面図・平面図



第7層 明茶褐色土層	第10層 茶褐色土層	第13層 灰茶褐色砂層
第8層 暗茶褐色粘質土層	第11層 暗茶灰色砂質土層	A 暗茶褐色砂質土
第9層 淡黄褐色土層	第12層 茶褐色粘質土層	B 赤褐色粘質土

地形的な制約によりながら、後円部側で両くびれ部の高さを意識して等しくしたために前方部との高低差を調整しなければならない結果になったと考えられる。

○葺石は2段目斜面が全体的に小さい河原石を用いている。基底の基石列は検出できなかった。2段目斜面は基石列に大きい石を横方向に整然と並べ、上方はそれよりも小さい石を用いている。葺石の作業単位とも言うべき両線は第4トレンチ西側1段目斜面と第5グリッド2段目斜面において、その可能性が考えられる。

○第3トレンチ1段目斜面において河原石の代わりに板石を用いている。別に板石を用いなければならぬ理由は考えられないのに用いていると言うことは、他所の構築で使用した残りの石材を利用したことが考えられる。したがって、埋葬主体に用いられている可能性があり、堅穴式石室を連想させる。

○埴輪は1段目テラス面で径38cm内外の円筒形埴輪を約1.5mの間隔で配置している。2段目テラス面においては3本一組という特異なもので、中央のものが大きく両側が小さい円筒形埴輪で、そのうちでも中央のものは朝顔形埴輪になるものと考えられる。また第4トレンチ東側2段目テラス面で検出した楕円形埴輪は何組目に配置されているのかは不明である。配置の間隔は約1m内外である。

○第7トレンチで検出した墳丘外側の濠状遺構は第8トレンチで検出した空堀状遺構とは結びつかず、古墳に伴なわない感じもするが断面観察の結果明確な切り合いも見られることより墳丘基底部外側に特別な施設を設けているようにもとれる。しかしこのトレンチだけでは確認できない。

○第5グリッドにおいて焼土塙が2ヶ所で検出された。本文中で述べ尽くせなかつたので要約してみると、1つは長さ1.2m、幅0.4mの長楕円形で2段目テラスの外端から斜面にかけてのもので底に炭の層が若干残っていた。壁は焼けていない。それほど強い火力とは考えられない。斜面の葺石は崩落しているものの上層からの掘り方も検出されず、流出した土や小石、埴輪片が直上で堆積しており、この中に形象埴輪片や高杯脚部も出土している。このようなことから後世の土塙とは考え難く、小石や葺石を葺く以前、段築成がほぼ完了した段階で行なっていると考えられる。このような焼土塙がどのような意味をもつものなのか今では定かにしがたいが、他の箇所ではみられなく、この東側くびれ部のみにあるということは前方後円墳においてくびれ部に1つの重要な意味があり、また形象埴輪片、高杯などが集中しているということと関連してとらえ、祭祀的な行為の1要素として考えうるものかも知れない。他の焼土塙も検出状態から同様であると考えられる。

注1 裷石の作業単位については山木彰、一瀬和夫、松岡良恵の各氏より御教示を得た。

## 2. 出土遺物

### (1) 墳輪

調査により出土した埴輪類は概ね、円筒形埴輪、朝顔形埴輪、楕円形埴輪、形象埴輪に分けることができる。いずれも墳丘各段のテラスにおいて検出したもので、大小の破片となっていたものが大半である。以下、復原したものを中心述べることとし、他の破片類に関しては観察表をもってかえることとする。

#### 円筒形埴輪 (第36、37図 1, 2, 4, 5, 6)

6段5次帯を基本とするものである。ほぼ垂直に立ち上がる胴部よりわずかに外反する口縁を持つが、特に5段目及び最上段の間隔が狭いことは、通常の円筒形埴輪と異なるところである。透孔には三角形(逆三角形)、鍵形の二種類が見られ、個体により一方に限られる。穿孔方式には2, 4, 5段目に各々4孔を開けるものと、さらに3段目にも2孔を有するものとがあり、いずれの場合も一方の突帯に偏って穿たれる。突帯は概して突出度の高いものであるが、個体間で若干の差異を有する。器面はハケメ調整を主として行ない、個体間および同一個体の各段において差異が認められる。なおいずれにも黒斑を有し、赤色顔料の痕跡を残す。

1. (埴輪番号3) 西側くびれ部より検出したもので、3, 6と共にセットをなす。2段目の3分の2程度を欠いているが、ほぼ全形を知りえたのはこの一例のみである。器高約79cm、口径37.7cmを計る。透孔は三角形を呈し、突帯は幅が狭く突出度の高いものがほぼ水平につく。外面調整は各段において異なり、最下段では縦ハケを、2段目では縦ハケのち横ハケを行ない、3, 4段目ではさらに斜めハケを施している。5段目及び最上段は縦ハケのち横ハケ、および横ナデを行なう。内面は最下段をつよい指ナデにより調整し、それ以外には横ハケ、斜めハケが残るが、4, 5段目において鋭いヘラケズリが施されている。

2. (埴輪番号7) 最下段および2段日の大半を欠くが、残存高47.6cm、口径35.7cmを計る。透孔は鍵形を呈し、幅が狭く突出度の高い突帯は、端面が深く凹んでいる。外面調整は2段日のみ縦ハケのち横ハケを行ない、3段目より5段目かけては縦ハケのち斜めハケ調整。最上段では斜めハケが横ナデにより消されている。内面にもハケメを残すが、ほとんどを横ナデ、あるいは指ナデによるため、凹凸がはげしい。

4. 後元部1段目テラスをめぐっていたもので、第2トレンチより検出した。残存高26.4cm、底径39.3cmを計り、特に器壁の厚さは1.2~2cmと他のものに比べて厚手である。外面調整は縦ハケのち、2段日のみ横ハケを施し、内面はつよい指ナデを縦方向、横方向に2回行なう。突帯は幅の広いものがややドガリぎみにつく。なお上部形態、透孔等は不明。

5. (埴輪番号6) 3段目より最上段にかけて復原した。残存高39.5cm、口径41cmを計る。透孔は三角形で、突帯は幅広く、端面はやや凹む。器面の調整には、突帯付設の前後を問わず縦ハケ、横ハケ、斜めハケが用いられ、内面は横ハケ、斜めハケを施したあと、口縁および突帯の裏をていねいな横ナデにより調整している。

6. (埴輪番号1) 3段目までを復原するが、2段目の大半は全く欠いている。残存高約42cm、底径34cmを計る。鍵形の透孔は2段目に4孔、3段目に2孔を穿つが、それぞれ向きを異にし、やや位置もずれている。端面が凹み、鋭い棱をなす幅の広い突帯を有し、付設に際しては、あらかじめ1段目では幅3mmの凹線を、2段目では径6mmの円形刺突を2.7~3.5cm間隔で施している。外面調整は突帯付設の前後ともに横ハケ、斜めハケが用いられ、3段目では先に縦ハケを施している。内面調整には注意を要する。すなわち、内面の大半に残るハケメは突帯直下に残る粘土紐の接ぎ目によって切られており、さらに3段目突帯直下の粘土紐の接ぎ目に当たる箇所の上端が、(註1)幅6mm前後の面をとどめていることは、これをいわゆる乾燥単位面とみなしうることを示唆するものであろう。

#### 朝顔形埴輪 (第36、37、38図 3、7、10、11)

3. (埴輪番号2) 全形を知り得たのはこの一例のみである。1、6とともにセットをなし、西側くびれ部でもひときわ目立つ位置に存在した。残存高117.0cm、底径44.8cm、肩部径53.4cmを計る。底部より肩部にかけて径を増して広がり、肩部ではやや丸みを帯びる。透孔は三角形で、2、4段目および肩部に各々4孔をあける。端面に凹みを有し、鋭い棱をなす幅広い突帯がやや下がりぎみにつき、付設前に径7mmの円形刺突を行なっている。また最下段に幅13cmにおよぶ粘土紐の接ぎ目が認められ、底部のみに幅広い粘土紐を使用したことがわかる。外面調整は最下段および2段目的一部に横ハケを用いる他は、突帯付設の前後を問わず、5段目までの全面に縦ハケ、斜めハケを用いている。この場合、ハケメの傾斜は上段ほど小さく、5段目では一部、横ハケに近いものとなっている。肩部には斜めハケのち横ハケを、頭部は横ハケのみ施している。内面は一部にハケメを残す他はほとんどを指ナデにより調整する。ただし、頭部および口縁には全面に横ハケ、斜めハケを施している。なお3段目下半に線刻画が描かれているが、何を表現するものか判断しがたい。器面には黒斑を有し、赤色顔料の痕跡が見られる。

7. 後円部東側2段目テラスより検出したもので、後述する楕円形埴輪とセットをなす。3段目までを残し、上部の形態はわからないが、3本セットの真ん中に位置すること、および3と同様の底径を有することより朝顔形埴輪と考えて差し支えなかろう。残存高43cm、底径47cmを計る。透孔は三角形で突帯は幅広くシャープなつくりである。また突帯付設にはあらかじめ刺突を行なっている。器面の調整には突帯付設の前後ともに、縦ハケ、斜めハケが施され、内面は指ナデ調整を主として行ない、特に最下段はつよくナデあげている。黒斑は内面にも一部認められる。

10、11. ともに口縁部の破片である。10は口径47.5cmを測り、外面を横ハケ、斜めハケ、内面を斜めハケのち横ナデにより整える。11は屈折部で、いったん擬口縁につくり、立ち上がり部を接合させたのち突帯を付設している。外面を縦ハケのち斜めハケ、内面を指ナデにより整える。

#### 楕円形埴輪 (第37図 8、9)

8、9. いずれも最下段の破片のみを残存し、全周するものではない。そのため正確な大きさ

は計り得ないが、掘方の規模等を参考にすると、いずれもほぼ長径54.0cm、短径30.0cmを計るものと推定される。突帯は8のみに残存し、幅の狭いものがかなり下向きにつけられている。端面の凹みもなく平坦で、他の円筒形埴輪のものとはかなり形状を異なる。外面調整は8、9ともに縦ハケ、斜めハケを用いるが、8はさらに底部付近のみ横ハケを施す。内面は両者ともに下から上へのつよい指ナデにより調整する。

#### その他の破片（第38図、12）

12. 口縁部の破片で、口径はおよそ44cmを計る。屈折部には断面三角形の突帯を付し、外反しながら口縁が立ち上がる。その傾きならびに突帯の形状より朝顔形、あるいは円筒形埴輪の口縁部とは考え難く、今回出土した中では他に例を見ないものである。調整は屈折部以下を縦ハケ、  
立ち上がり部を横ナデにより、内面にはハケメが残る。(註2) なお壺井御旅山古墳の出土資料の中に、これと類似した形態の口縁部をもつものがある。

#### 形象埴輪（第33図 1～4）

すべて東側くびれ部より検出した。1、3、4はいずれも2段目テラスの焼土坡上面ならびにその付近より出土のものである。破片のみに限られ、全形の分かることはなかった。

1. 幅3.3cmの広い突帯を有するもので、家形埴輪の棟木にあたる部分と思われる。突帯左右が1.3cmの厚さでやや弯曲しながらのび、その表面に3本の刻線が見られる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で黄白色を呈する。

2. 1と同様、家形埴輪の棟木にあたる部分であろう。幅4.6cmの突帯を有し、短辺側の一方がやや傾きを変えて棟をなしている。胎土、焼成、色調ともに1と類似する。

3. 盾形埴輪の破片で、盾本体と円筒部の接合部にあたる。表面には鋸歯文の一部、および梯子状の線刻を有する。本体、円筒部はともに約1cmの厚さをもち、その間に接合粘土を充填させている。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で淡黄褐色を呈する。

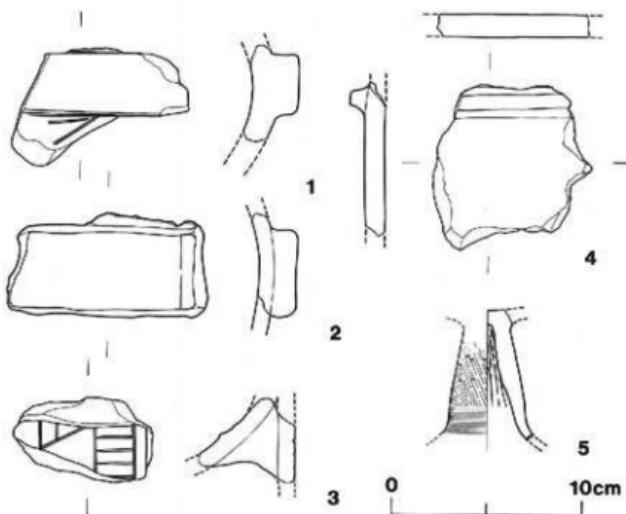
4. 厚さ約1cmの器壁に断面台形の突帯を付設しており、いずれの方向をとっても平坦面をなしている。このため通常の円筒形埴輪とは考え難く、家形埴輪の一部、あるいは橢円形埴輪の直線部分かとも考えられる。胎土には砂粒を含み、焼成はあまく赤褐色を呈する。

#### (2) 土師器

東側くびれ部の2段目テラスより2点出土している。うち1点は、



第32図 第5グリッド出土形象埴輪



第33図 第5グリッド出土遺物実測図

第5グリッド南西コーナー付近の埋土中より、他の1点は前述の形象埴輪類とともに焼土埴直上より検出したものである。いずれも高杯であるが、図示した焼土埴上面出土のものについてのみ述べることとする。

#### 高杯脚部（第33図 5）

5. 脚柱部のみ残存する。残存高6.6cm、脚柱最大幅4.2cmを計り、やや中ぶくれの脚柱が裾部で急に外へ開く形態をもつと考えられる。外面にはこまかいヘラミガキが施され、裾部との屈折部をさらに横にナデしている。内面は下半部をナデにより調整するが、しばり痕を顕著に残している。精製された胎土が用いられ、淡黄褐色を呈し、焼成も良好である。小若江北式に併行するものと考えられる。

#### (3) 遺物のまとめ

調査により出土した遺物は、以上のごとく埴輪類と土師器に限られた。中でも出土遺物の大半を占める埴輪類に関しては、特に製作技法に重点を置いて述べるようつとめたが、なお論じ尽くせぬ部分が多かったと思う。ここでは特に、大石塚古墳出土埴輪を全体的にながめることにより、その特色を明らかにしたい。

まず形態上の特色についてみると、1. 円筒形埴輪の口縁部形態（5段目および最上段）が通常の円筒形埴輪のそれと異なること 2. 朝顔形埴輪の肩部に丸みを帯び、やや初現的な様相をうかがわせること 3.



第34図 高杯脚部

横円形埴輪を含むこと 4. 透孔には三角形、鑑形の 2 種類があり、各段の孔数は 4 孔ないし 2 孔であること、などがあげられる。

また製作技法の上からながめると、すべて幅 3 ~ 4 cm の粘土紐の積み上げによることが知られ、すでに見た第37図 6 のように乾燥単位面を明瞭によみとることのできるものも存在する。このことは、他のもので各段ごとに中ぶくれの形状をなすことや、重みを生じていることからも、おそらく 1 段を 1 乾燥単位として成形していった可能性を示唆するものであろう。

器面の調整については主としてハケメが用いられ、個体間あるいは同一個体内の各段において差異が認められた。とくに突帯付設の前後を問わず、縱、横、斜めのすべてのハケメが行なわれていることは注目に値しよう。また内面は、ハケメおよびナデ調整を行なう場合が多いが、一部にヘラケズリの使用も見られた。なおハケメの方向による粗密の差は認められなかった。

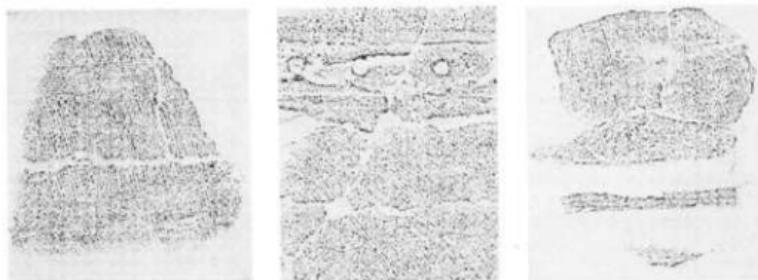
突帯には概ね 2 種類が認められた。ひとつは幅が狭く突出度の高いもので水平につき、いまひとつは幅が広く、やや下がりぎみにつくものである。その付設に際しては、円形刺突ならびに凹縁の 2 つの技法が見られた。

焼成はほとんどの個体に黒斑を有するところより野焼きによるものと思われる。また器面の各所に赤色顔料の痕跡を残すものが多く、全面に塗布されていた可能性が高い。

以上のような特色を有することが明らかになった。

(注)

1. 赤坂次郎「円筒埴輪製作窓書」『古代学研究』90 1979
2. 大阪府教育委員会「羽曳野市壹井御底山前方後円墳発掘調査報告」 1968

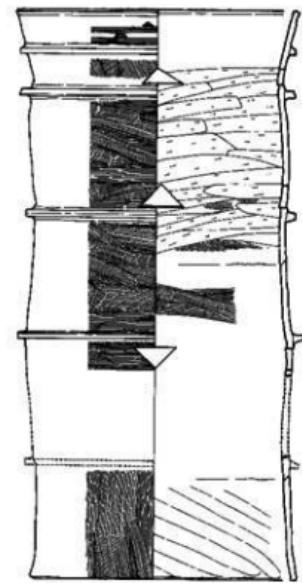


第35図 塩輪表面調整拓影

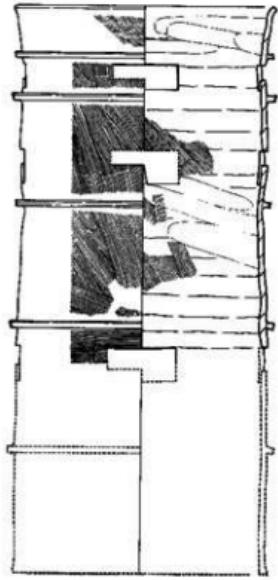
埴輪観察表（第36～39図）

図面番号	写真番号	出土場所	法量(cm)	外面調整	内面調整	透孔	突帯	備考
1	図17-1	第6グリッド	器高約79 口径37.7 底径36.4	縦ハケのち斜め ハケ、横ハケ	横ハケ、斜 めハケのち ヘラケズリ	△ ▽	フ	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 黄褐色
2	図17-2	第6グリッド	口径35.7	縦ハケ、斜めハケ のち一部横ハケ	縦ハケ、斜 めハケを一 部に残す	■	フ	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
3	図17-3	第6グリッド	器高117.0 底径44.8	縦ハケ、斜めハケ のち一部横ハケ	横ハケ、斜 めハケを残 す	△ ▽	フ	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
4	図18-3	第2トレンチ	底径39.3	縦ハケのち一部 横ハケ	横・横2方 向の指ナデ		フ	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 乳黄褐色
5	図18-1	第6グリッド	口径41.0	縦ハケのち横ハ ケ、さらに斜めハ ケ	横ハケ、斜 めハケ、横 ナデ	△	フ	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 淡茶褐色
6	図17-4	第6グリッド	底径34.0	突帯付設の前後と もに縦ハケ、横ハ ケ、斜めハケ	横ハケ、斜 めハケ、指 ナデ	□	刺突 凹線	胎土 砂粒多い 焼成 良好 色調 黄褐色
7	図18-2	第4トレンチ	底径47.0	突帯付設の前後と もに縦ハケ、斜め ハケ	指ナデ	▽	刺突	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
8	図18-5	第4トレンチ	長径約54 短径約30	縦ハケ、斜めハケ のち、底部付近 のみ横ハケ	つよい指ナ デ		フ	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
9	図18-6	第4トレンチ	長径約54 短径約30	縦ハケのち斜め ハケ	つよい指ナ デ			胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
10	図18-4	第5グリッド	口径47.5	横ハケ、斜めハケ	斜めハケの ち横ナデ			胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
11	図18-4	第5グリッド	突帯径32.5	縦ハケのち斜め ハケ	指ナデ		フ	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
12	図18-4	第6グリッド	口径44.0	縦ハケ、横ナデ	横ハケ、斜 めハケを残 す			胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
13	図18-4	第6グリッド	口径33.0	縦ハケ、横ナデ	横ハケ、横 ナデ		フ	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
14		第4トレンチ	口径41.2	縦ハケのち横ナ デ	風化のため 不明		フ	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色

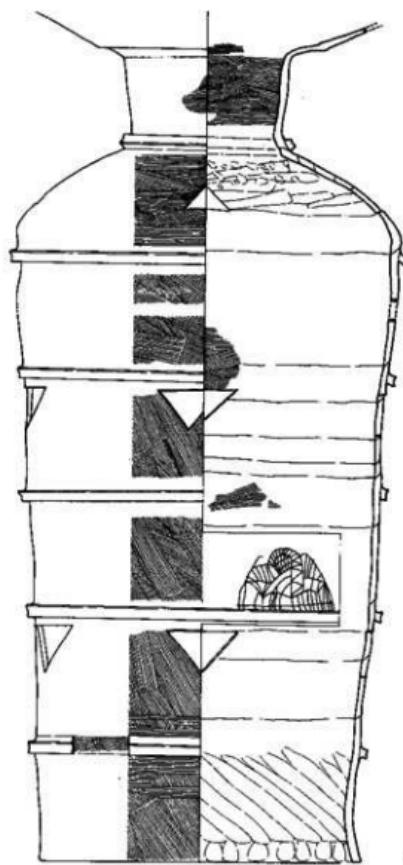
画面番号	写真番号	出力場所	法量(cm)	外面調整	内面調整	透孔	突帯	備考
15		第6グリッド	口径29.6	突帯付設の前後ともに縦ハケ	指ナデ		フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 淡赤褐色
16		第6グリッド	底径37.6	縦ハケののち斜めハケ	指ナデ		フ	粘土 砂粒多い 焼成 良好 色調 淡茶褐色
17	図18-4	第6グリッド	底径33.0	縦ハケを残す	指ナデ		フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 淡赤褐色
18	図18-4	第5グリッド	底径42.0	突帯付設の前後ともに縦ハケ	指ナデ		フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
19	図18-4	第5グリッド	底径31.1	縦ハケ、斜めハケ	つよい指ナデ		フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
20		第6グリッド	突帯径41.8	縦ハケののち、幅5cmの横ハケ、一部に斜めハケ	指ナデ	△	フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
21		第5グリッド	突帯径33.2	突帯付設前後ともに縦ハケ、斜めハケ、一部に横ハケ	縦ハケ、斜めハケののち指ナデ	△	刺突	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 淡茶褐色
22		第5グリッド	突帯径41.5	縦ハケののち横ハケ、さらに斜めハケ	指ナデ	▽	フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
23		第5グリッド	突帯径35.9	縦ハケ	縦ハケ、斜めハケののち指ナデ	▽	刺突	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
24	図18-4	第6グリッド	突帯径37.8	突帯付設前は横ハケ、のち縦ハケ、横ハケ	斜めハケののち指ナデ	▽	フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色
25		第6グリッド	突帯径30.0	縦ハケののち斜めハケ	指ナデ	フ	フ	粘土 砂粒多い 焼成 良好 色調 黄白色
26	図18-4	第5グリッド	肩部径40.0	斜めハケ、横ハケののち縦ハケ	横ハケ、斜めハケ	△	フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 淡赤褐色
27		第5グリッド	肩部径39.1	斜めハケののち横ハケ	指ナデ	△	フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色
28		第5グリッド	肩部径49.3	縦ハケ、斜めハケののち横ハケ	指ナデ		フ	粘土 砂粒含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色



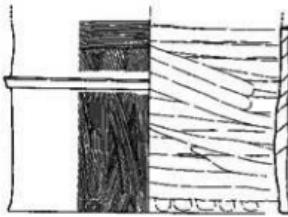
1



2



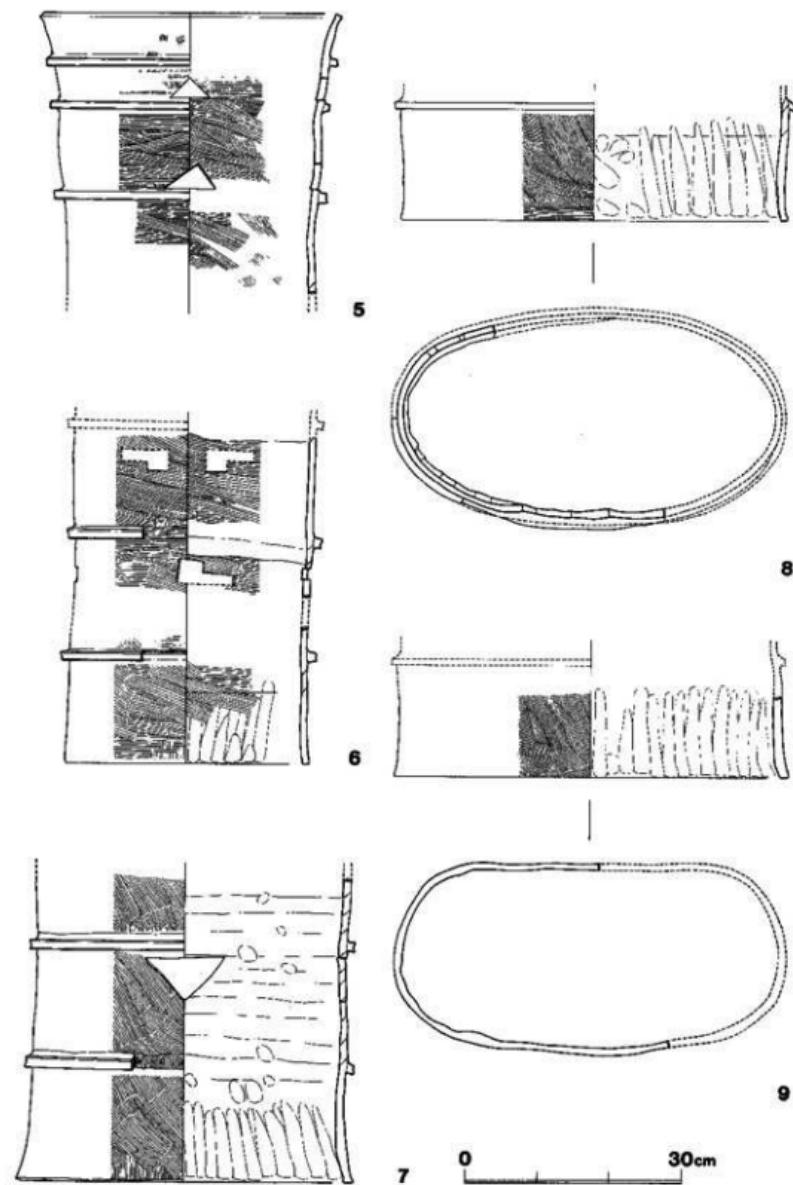
3



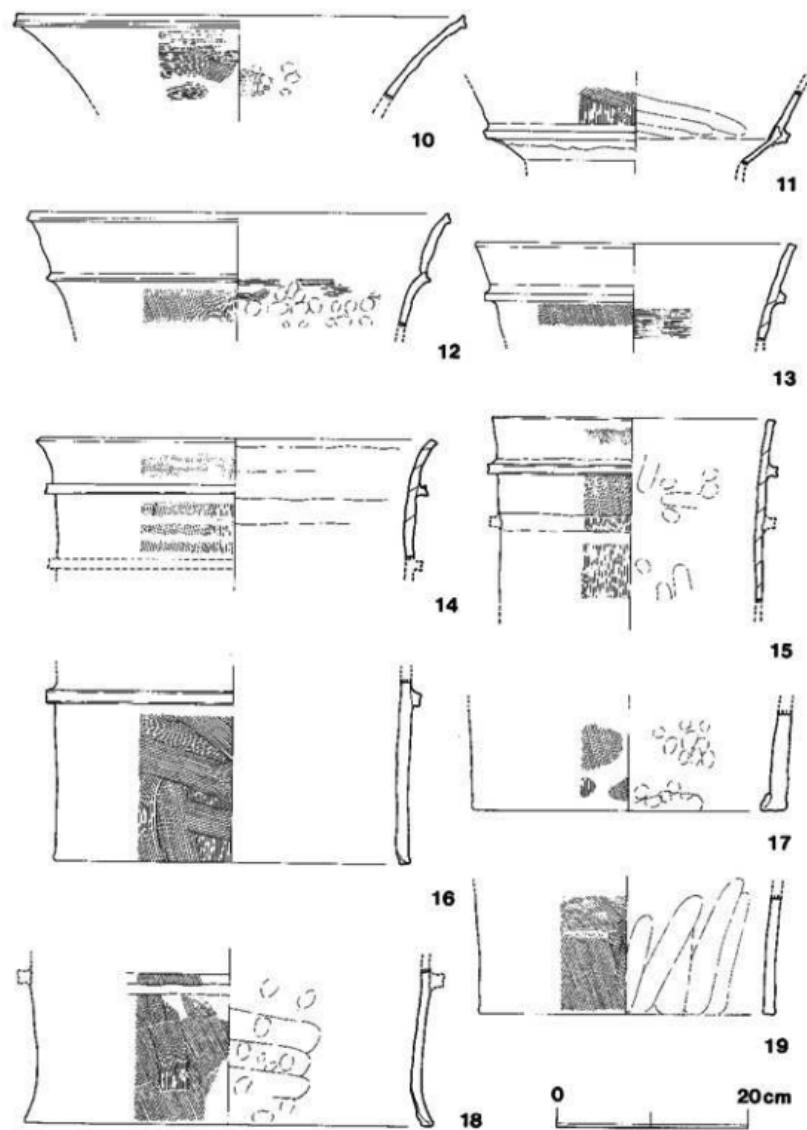
4

0 30cm

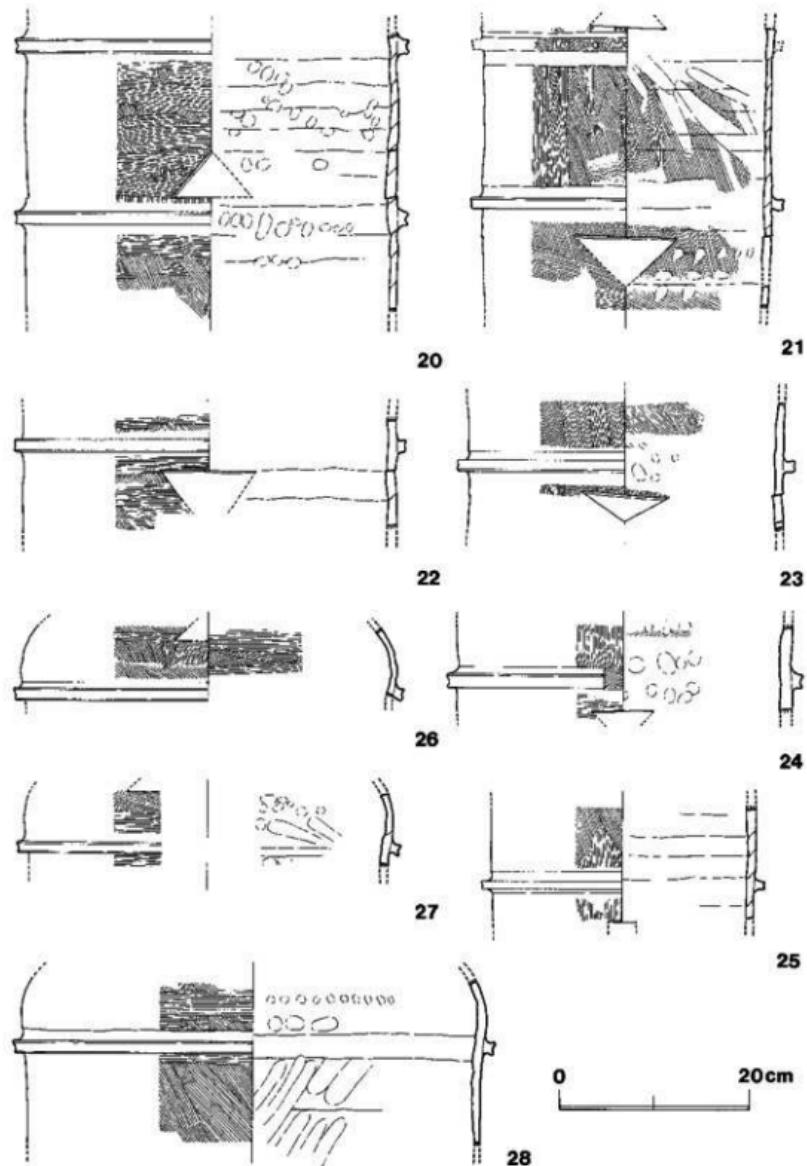
第36図 大石塚古墳出土埴輪実測図



第37図 大石塚古墳出土埴輪実測図



第38図 大石塚古墳出土埴輪実測図



第39図 大石塚古墳埴輪実測図

## VII まとめ

以上の結果、従来言われていた桜塚古墳群の時期よりもさかのばる要素が強くなってきた。そこで、遺構のまとめ、遺物のまとめと重複をさけながら若干考えられることを述べ、まとめにしたいと思う。

### 1. 選地について

選地の条件として、まず両古墳が立地する地形をみると、西方に張り出した丘陵と南西方向に張り出す丘陵のネックに両古墳が狭い谷地形を挟んで、それぞれ立地している。最高所は標高約26mで、最高所より南側に下った標高20m～21mの間で、やや平坦面を呈する地形上に位置する。特に大石塚古墳においては、その傾向が強く台地上地形を呈している。西方の低地は標高約7m～8mで比高差約13mほどである。立地条件としては最適地とはいがたい所である。というのには、大石塚古墳においては後述するように前期的な様相を示す古墳である。他の前期古墳の立地が通常、平野を見おろす高所に立地するのに、やや奥まった所に位置し、また付近でも南方の平野部に近い丘陵が眺望も良い。しかし、この丘陵には同時期と思われる集落、原田遺跡などがあり、そのようなことも考慮して現在の所に選地したことも十分考えられる。しかしながら、このように考えられることは現在の地形から想定し得るもので、古代においては我々が考えるほど眺望は悪くなく、十分平野部からその莊嚴な姿を仰ぎみること



第40 旧地形想定復原図

ができたかもしれない。小石塚古墳の選地についても大石塚古墳を意識しており、主軸をそろえるように努めている。したがって約3度ぐらいのずれしかない。

単位 m	後円部			くびれ部		前方部		
	1トレンチ	3トレンチ	5トレンチ	6グリッド	7トレンチ	10グリッド	12グリッド	11トレンチ
地山高	20.8	21.1	20.7	20.4	20.6	20.1	20.1	20.1
基底高	20	20	19.75	19.8	19.9	20	20	20

## 2. 墳丘築造について

築造に際して、旧地形をどのように利用し、またどのように盛土を行なったかは築造過程における关心の一つであるが、今回の調査の性格上、墳丘の観察は最小限度にとどめ、小石塚古墳のみ一部断面観察を行なった。大石塚古墳においては葺石、埴輪等の外部施設保存のために墳丘内の観察は行なわなかった。

小石塚古墳においては調査の結果、地山を削り出して墳形を整えていることがわかったが、その結果、東側だけに壠状の遺構が残り西側と前方部ではないという特異なものである。このことは旧地形を最大限利用し、また労働量を最小限にとどめようとした結果と考えられる。そこで、このような特異な壠状遺構をもつ結果について考えてみると、築造過程において地山が墳丘基底面より1段目斜面の途中まで墳丘面として利用されている。したがって、この地点で地山を整地し墳丘基底面を削り出して墳形を整え、基底面を意識的に同一レベルに仕上げている。このことより基底面の基準を旧地形の一一番低い所の前方部に設けた場合、北東方向の地形的に高い部分だけを特に多く削らなければならなかった結果、また古墳を明確に区別するために行なわれたもので、堀削的な性格のものであると考えられる。

大石塚古墳においても東高西低という地形的な制約によって、墳丘築成に影響をあたえていることは前述したが、今その数値を示してみると、後円部においては東側で基底面19.3m、1段目斜面長約1m、1段目テラス面19.75mで高低差0.6m、2段目斜面長約3.5m、2段目テラス面21.5mで高低差1m、西側では基底面18m、1段目斜面長約3m、1段目テラス面19.20m、2段目斜面長約3.2m、2段目テラス面20.5mである。基底面の高低差約1.3mを徐々にではあるがなくそうとし、また盛土の流失、墳形のバランスなどを考え、西側の斜面が長めに、墳頂平坦面が東

単位 m	基底面	1段目斜面	1段目テラス	2段目斜面	2段目テラス	3段目斜面	墳頂平坦面(残存高所)	
							東側	西側
後円部	東側	19.3	1	19.75	3.5	21.5	9	23.9
	西側	18.0	3	19.2	3.2	20.5	15	23.9
くびれ部	東側	19.3	1	19.9	4.2	21.4		21.5
	西側	18.7	2	19.5	6	21.4		21.5
前方部	東側	19.3	1	19.9	2.4	20.9		21.3
	西側	18.55	1.5	19.3	1.2	20.2	2.7	21.3

側寄りになったものと考えられる。前方部において、東側では基底面と1段目斜面は検出できなかつたが、後円部側とくびれ部で検出した高さに差がないので、前方部においてもほぼ同じ高さと思われる。このことより推定すると、基底面19.3m、1段目斜面長約1m、1段目テラス面19.9m、2段目斜面長約2.4m、2段目テラス面20.9mで墳頂平坦面21.3mである。西側においては基底面18.55m、1段目斜面長1.4m、1段目テラス面19.3m、2段目斜面長1.2m、2段目テラス面20.2m、3段目斜面長2.7m、墳頂平坦面21.3mである。東側と西側では基底面の高低差約0.7m～0.8mで東側の基底面と西側1段目テラスの高さがほぼ同じくらいになり、同じような比率の高低差で2段目テラスまで進み、その高低差が3段目にいて墳頂を水平にするという意識から極端に違ってきている。このことは西側くびれ部で2段目テラスが前方部に移行する際に段差をもって接続することと無関係ではなく、すべて墳形のバランスを考えて行なったものと思われる。また西側からみて均整のとれた築成にするということと関連して西方の平野部からの眺望を意識した上でのことと考えられる。地表面の利用は、東側で1段目テラス付近まで、西側においては基底面のみであり、旧地形から想定するに墳丘の骨は盛土によったものと考えられる。

### 3. 築造年代について

さてここで、両古墳の築造年代について、若干ふれてみたいと思う。年代を決める手段として、すべてのことを総合して判断することが望ましいことは今さら述べることでもない。しかし今回の調査の性格上、規模、墳形、段塗成、外部施設（堀、葺石、埴輪）、に重点を置いたため、総合的な判断が欠けることはやむをえない。それでも小石塚古墳においては削平されているものの粘土構を検出し、大石塚古墳においては河原石の葺石のかわりに板石を用いるという箇所もあり、<sup>註1</sup>その板石が裏六甲から三田方面に産するものを用いているということになれば前述したように、竪穴式石室の可能性が強い。このように内部構造の一端もうかがうことができる。墳形は両古墳とも前方部があまり開かない、そして後円部の高さに比べて前方部が低いという、いわゆる古式の古墳の範疇に入るるものである。このようなことから凡そその時期は察せられるのであるが、近年埴輪の研究も進み細分された編年案も示されるようになり、また幸いにも小石塚、大石塚両古墳とも時期を限定しやすい埴輪や土器が出土しているため、他の古墳出土の資料と比較しながら考えてみたい。

小石塚古墳においては埴輪の数は多くなく、ほとんど破片で風化が激しく全体を復原しえるものはないが、の中でも朝顔形埴輪片、並形土器から考えてみると埴輪は全体的に薄手で、突帯もシャープなものが多く、透孔も突帯に近く三角形か逆三角形（第18図19番）、円か半円（第18図16番）である。<sup>註4</sup>朝顔形埴輪は胴が張る古相のもので、口縁部が通常の朝顔形埴輪より外反度がきつく、口縁端部は下方にやや拡張した垂れ下がりの特徴をもつ。調整はわりと細かいハケメで、タテ、ナナメ、ヨコ、いずれもあり、そのうちタテハケのみで突帯が台形に近いや新しい様相を示すものもある（第18図18番）。以上のようなことから赤塚編年の1期2段階から3段階に、川西編年のII期には相当するものと考えられる。そこで並形土器についてみると胴部最大径を

中位よりや上方に有し、肩部が張り底部にいくにしたがってすばまるプロポーションを呈している。調整は外面上半を主にハケメで下半をヘラミガキし、内面は整形時の指頭をヘラケズリによって消すものがほとんどである。底部は遺物のところで述べているように最初からつくることを意図しなかったもので、底部外端でやや肥厚気味にさせ終る。この様の壺形土器は箸塚古墳、<sup>註4</sup> 桜井茶臼山古墳、都月1号墳に代表される球形か、やや下ぶくれ気味の器形にへラ状工具のようなもので穿孔するいわゆる底部穿孔壺形土器のタイプより、畿内周辺部および以遠で出土している若干平底をとどめているタイプに共通している。また、それらが底部を穿孔するという意味、ないし祭祀形態を知りながらも器形を統一するのではなく、それぞれバラエティに富む個性的な在地性の強いものであると考えられている点なども共通する。このように考えてみると、この段階のものはほとんどが円筒形埴輪を伴ない、埴輪と同様にして用いられているものなどがあり、<sup>註5</sup> 初源的な意味合いよりも形式化した、ただ底部を穿孔するというのみに面影をとどめ、本来の意味は薄らいだものとみられる。また小石塚古墳出土のものは頭部と口縁部に特徴を有する。頭部がやや斜め上方に立ち上がり、口縁部が大きく外反するので朝顔形埴輪とほとんど大差はない。口縁部を下方に拡張する点なども同じである。頭部の形態においても桜井茶臼山古墳に代表される直立気味のものと都月1号墳のように斜め上方に立ち上がるものがあり、口縁部の外反度もきつい。小石塚古墳のものは後者の方に類似する。頭部と口縁部においては朝顔形埴輪となんら変わりはないが、胴部においては球形にするわけでもなく個性的なものである。胴形の類似するものをしいてあげれば、橋本市霜山遺跡、宝藏山4号墳などがある。<sup>註6</sup>

<sup>註7</sup> このような壺形埴輪と呼びうるものか「朝顔形埴輪」と共存し、どのように配置されていたか興味深いことであるが、すべて崩落した状態であり不明である。しかし後円部墳頂に囲繞する可能性が強く、出土遺物のうち円筒形埴輪の口縁部が1点もないことなどから、直接埋めて立て並べたものであろう。壺井御旅山古墳と比べて、円筒と朝顔の違いこそあれ同じ解釈ができるものと思われる。または同時期とみてさしつかえないであろう。

大石塚古墳においては全体を復原できた埴輪があり、小石塚古墳に比べて良好である。個々の特徴は山土遺物を参照していただくとして、他の古墳の出土資料と比較してみると、朝顔形埴輪は通常のものより大型である。しかし同じような形態変化をとげるものとして見るならば、肩の張りに比べて上方がやや低くなっているが初現的な様相をとどめ、また透孔も三角形で突帯に近く肩部にも穿孔するという特異なものである。肩部に穿孔する例は布留遺跡出土の勾玉形のものがよく知られるが、その他熊本県前田遺跡の円形および三角形のもの、揖津万籠山古墳の円形のものなど数例が知られる。円筒形埴輪においては最上段の突帯の間隔が狭いと言う特異なものである。<sup>註8</sup> 蟻付朝顔形埴輪においては東大寺山古墳、マエ塚古墳などで知られるが、円筒形埴輪において大石塚古墳のタイプの類例は現在のところ知らない。しかし口縁部と最上段突帯の間隔が狭いものがあることは都出比呂志氏が指摘されているところである。大石塚古墳の最上段の突帯と、その下段の突帯間の狭い部分を除けば、興戸古墳出土の資料に最も近似する。また形態において、突

帝間がふくらみをもち森幹軍塚古墳などと類似する。透孔においても円形のものではなく三角形、逆三角形、鍵形と古い様相を示す。調整にも内面へラケズりするものがあり、メスリ山古墳、平尾城山古墳<sup>註23</sup>、妙見山古墳、八幡茶臼山古墳、浜津万籬山古墳などで知られている。浜津万籬山古墳、大石塚古墳出土のものを除くとすべて最下段に用いられているのに比べて中段より上段部に用いられている違いがある。

また注目される埴輪類の中に楕円形埴輪がある。そこで巣内における楕円形埴輪の出土している古墳をあげると次のようになる。

	出 土 場 所	法 量(cm)	調 整		透 孔	内 部 構 造	出 土 器
			外 面	内 面			
大石塚古墳	後 円 部 東 間 2段目テラス	54 × 30	タテハケ	ナ テ		豊穴式石室?	高杯脚部
飯岡車塚古墳	後円部基底部外	44.5×31.9	縦かい ケとナテ	ナ テ	逆三角形	豊穴式石室	
妙見山古墳	後 円 部 墳 頂	48 × 30				豊穴式石室 組合せ石棺	
平尾城山古墳	後 円 部 墳 頂					豊穴式石室	二種類
弁天山C1号墳	墳丘の各所から	1例 55 × 25	タテハケ		三 角 形 漫三角形 川	豊穴式石室	腹、小型丸底板
松岳山古墳	前 方 部	73×40内外				豊穴式石室 組合せ石棺	各 種
櫛 山 古 墳	中 円 部 墳 頂	70.5× 49	タテハケ 縦かい ハケ	ナ テ		豊穴式石室 長持形石棺	高 杯 ミニアチュエ空

また巣外においては岩崎山4号墳のものがある。これらの中で櫛山古墳、弁天山C1号墳のものなどがよく知られ、用途のよく判らないものであったが、平尾城山古墳において形象埴輪が<sup>註28</sup>のる特異なものであることが確認され、その一端をうかがうことができる。しかし弁天山C1号墳の特に扁平なものや、櫛山古墳の中円部墳頂に圓鏡するもの、妙見山古墳の後円部墳頂に円形<sup>註29</sup>のものと交差に配置するものの、飯岡車塚古墳の後円部基底部外にまわるもの、また前方部に配置されているものなどさまざまであり、すべてに形象埴輪がのるとは限らず、楕円形埴輪のもつ意味を改めて問う必要があろう。

さて、その時期であるが比較的内部構造もわかり、また土器を伴っているものが多い。近年、布留式土器も細分され、古墳の出現ともからみ論議が活発である。このようなことから時期も限定されそうである。内部構造の単純な形式変化で追うならば、豊穴式石室に削竹形木棺を納める平尾城山古墳、飯岡車塚古墳、豊穴式石室に組合せ石棺を納める妙見山古墳、また長持形石棺の先行形式ともみられる組合せ石棺を納める松岳山古墳、豊穴式石室に長持形石棺を納める櫛山古墳という変化がみられ、妙見山古墳や松岳山古墳の微妙な時期は別としても、この一群で櫛山古墳が最も下り、いわゆる前Ⅰ期後半から前Ⅱ期にわたる時期に用いられている。土器の点からみると、平尾城山古墳出土のものは「布留式と思われる」と報告され、弁天山C1号墳前方部<sup>註30</sup>粘土郴出土のものは小若江北式と報告されている。松岳山古墳出土の高杯脚部などは、実測図からだけの判断であるがそれほど差異は感じられない。櫛山古墳出土の高杯は若干特異な様相を示す。

し、型式編年をあてはめることを躊躇させる。また他の前期古墳の中の資料をみても、それほど型式差は認められなく布留Ⅰ式の中頃ないし後半の範疇におさまるものと思われる。<sup>註41</sup>

このようなことから大石塚古墳の築造年代について考えてみると、埴輪は赤塚編年のⅠ期の1段階から2段階、川西編年のⅠ期からⅡ期にかけての特徴を多く有する。土師器は前述したように、他の古墳出土のものと型式差は認められなく、かえって古い様相を示している感じさえする。しかし埴輪の外面調整において、初期のものがタテハケのみでなく、ヨコハケも混じり多様化であると言ふことに反して、大石塚古墳のものにおいて画一化の兆しがみえ、若干遅れる要素が強い。このようなことを考慮してみるならば、大塚編年の前Ⅱ期の範疇に、また都出比呂志氏の最近の編年案の前Ⅲ期に相当するものと見ておきたい。<sup>註42</sup>

以上の結果、從来より言っていた桜塚古墳群の時期よりもさかのばり、西群が先行することが明らかになった。西摺北東部の前期古墳と比べてもそれほど時期差は考えられなく、あらたに問い合わせ直してみる必要があろう。

註1 奥田尚氏の御教示による。付載参照

註2 東大寺山古墳、平尾城山古墳、その他の初期の胡麻形埴輪と比べても大差ない。また大石塚古墳のものと比べても古相を示しているように思える。

註3 川西宏幸「円筒埴輪統論」(『考古学雑誌』第64巻2号 1978年)

赤塚次郎「円筒埴輪製作覽古」(『古代学研究』90号 1979年)

註4 中村一郎・笠野敏「大市墓の出土品」(『青陵都紀要』27号 1976年)

註5 中村春考・上田宏范「桜井茶臼山古墳」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19号 1961年)

註6 近藤義郎・森成秀爾「埴輪の起源」(『考古学研究』第13巻3号 1967年)

註7 田代克己「羽曳野市森井御旅山前方後圓墳発掘調査概報」(大阪府文化財調査概要 1967年)

註8 底部穿孔筒形土器が主に二重口縁のものに限られることは從来よりいわれているように底部内第5様式中頃に出現する二重口縁筒形土器の系譜を引くことは明らかである。しかしその段階では焼成前に穿孔する例は少なく、またこの種の祭祀に二重口縁筒形土器を用い、焼成前に穿孔するということは成形時より決まった用途に用いるという画一性がみられる。(今までの転用ではなく) 穿孔、茶臼山の出現をまたなくとも、弥生後期中葉以後の社会において定着し、古墳時代前葉の社会に受け継がれたものと理解される。したがって焼成後の穿孔ではなく焼成前の穿孔に意味をもたせ、その画期とする。そしてこの段階を初現と考え用いた。なお穿孔土器については勝部明生「穿孔土器の考察 大阪船橋遺跡出土例を中心にして」(横田健一先生還暦記念「日本史論叢」1976年)にくわしい。

註9 金剛山古墳においては穿孔を有しないものが円筒形埴輪の上にのせられている。

鍛木義典・西谷真治「金剛山古墳」(倉敷考古館研究報告 第1号 1959年)

註10 註5に引用されている。

註11 堀本正郎「宝鏡山古墳発掘調査概要」(京都府教育委員会 墓廟文化財発掘調査概要 1967年)

註12 三木文雄「はにわ」(『日本の美術』第19号 美文堂)、森成秀爾「埴輪」(『考古資料の見方 遺物編』)地方史マニュアル6(柏原房)などで使用されている。

註13 底部より上方7~8cmの外側に帯状に若干変色している部分があり、その可能性を示唆する。

註14 関田雅臣「初期の朝鮮形埴輪」(『考古学雑誌』第63巻3号 1977年)

註15 註16による。また笠田氏より直接御教示いただいた。

註16 直宮康一「摺津方輪山古墳」(宇城市教育委員会 1975年)に胡麻形埴輪として報告されているが、実測図をみるとかぎり通常の胡麻形埴輪とは若干異なる。他の器形や古相の円筒形埴輪に共通する要素が強いが、一

處ここでは列記する。

註17 註14に同じ

註18 小島俊治「マエ塚古墳」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第24号 1969年)

註19 都山比呂志「四、元福寺古墳前方部墳丘の調査—京都向日丘陵の前期古墳群の調査」

(『史林』第54巻6号 1971年)

註20 梅原木治「田辺町奥戸の古墳」(『山城における古式古墳の調査』京都府文化財調査報告 第21号 1955年)

註21 岩崎卓也「長野伊森将軍家古墳」(更埴市文化財調査報告書 第5集 1973年)

註22 伊達宗泰・小島俊次「メスリ山古墳」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35号 1977年)

註23 近藤尚一「平尾城山古墳第1次発掘調査概報」(平安博物館考古学第3研究室 1977年)

註24 都山比呂志「妙見山古墳出土の埴輪—妙見山くびれ部の調査 京都向日丘陵の前期古墳群の調査」(『史林』第54巻6号 1971年)

註25 註3の川西氏の論文より引用

註26 註16に同じ

註27 今回調べたものだけであり、おそらくまだあると思われる。

註28 生川雅道氏より御教示いただいた。法量は長径約40cmぐらいで雄田允濟会郷土館に陳列されているとのこと。

註29 小島俊治「梅山古墳」(桜井茶臼山古墳 所収 1961年)

註30 塚口正三・西谷正「弁天山C1号墳」(『大阪府文化財調査報告』第17号 1976年)

註31 註23に合子形とおぼしきものと記載されているが、直接川西氏より家形であるとの説明をうけた。なお近時、報文書を刊行する予定で詳細はその時にふれるのです。今回、平尾城山古墳の埴輪を実見する機会を得た。快く水譜していただいた平安博物館ならびに川西氏に記して感謝します。

註32 梅原木治「大枝村妙見山古墳の調査」(『京都府史跡勝地調査会報告』第3冊 1922年) 註24において、近藤尚一氏が再報告している。

註33 古村正親「板岡本塚古墳発掘調査報告」(田辺町教育委員会 1976年)

註34 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土器類」(『考古学雑誌』第60巻2号 1974年)

註35 小林行雄「河内松原山古墳の調査」(大阪府文化財調査報告書 第5号 大阪府教育委員会 1957年)

註36 石野博信「大和東南部における前期古墳群の形成過程と構成」(横田健一先生還暦記念「日本史論叢」1976年)によると羅向5式ないし6式とされている。

註37 大冢初重「古墳の変遷」(『日本の考古学』評河出書房)の区分による。

註38 註23に同じ

註39 註30に同じ

註40 奈良県立考古博物館、時部明生、千賀久氏の御配慮により実見させていただいた。記して感謝いたします。

註41 石野博信「古代羅向川の調査」(『背陵』第19号 1972年)の区分による。

註42 都山比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻3号 1979年)

付載

## 大石塚古墳使用の葺石の石種とその産地について

奥田尚

柳本氏の依頼により、葺石に使用していた礫の一部、8個を調べる機会を得たのでここに報告する。

葺石に使用している礫種は、アライト質花崗岩、流紋岩、流紋岩質凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、砂岩、チャートである。これらの礫種について述べる。

アライト質花崗岩：長径15cmで表面がざらざらし、角がわずかにとれた淡桃色を呈す亜角礫である。造岩鉱物としては長径7mmに及ぶ淡灰色透明の石英が点在する。また、石英は長径1~2mmの網粒のものが多く、ほぼ同径の淡桃色を呈す長石粒も多い。黒雲母は長径5mmに及ぶものもあるが、わずかである。

流紋岩：長径14.5cmで表面は茶色を呈するが、新鮮な面は灰白色を呈する亜角礫である。造岩鉱物としては網粒の自形をなす無色透明の石英が点在する。無色透明の長石もわずかに認められる。石基は灰白色を呈し緻密で固い。

流紋岩：長径11.5cmで淡茶色を呈する亜円礫である。長径1mm程の球状をなす茶灰色の斑点が多い。他に針状の網粒物質も認められる。石基は淡茶色緻密で固い。

流紋岩質凝灰岩：長径15cmで淡桃色を呈する亜円礫である。一面には輝綠岩様の網粒の角閃石、桃色の長石からなる部分があり、この礫から判断すれば捕獲岩か貫入岩と考えられる。構成粒は橢円形で淡茶色の軽石が多く、長径5mmに及ぶものもある。石英は無色透明でまれに、長径5mmに及ぶものもあるが、ほとんどは1~1.5mmのものである。長石はほとんど桃色を呈し、長径5mmに及ぶものもある。黒雲母の網粒も認められる。基質は淡桃色緻密で固い。

流紋岩質溶結凝灰岩：2個あり、一方は長径20cmで、他方は10.5cmのものである。厚さは35cmと2cmである。いずれも同質で平坦面は節理面であると推定され、加工面の可能性はない。流理構造と溶結構造が認められる。構成粒は長径6mmに及ぶ自形の淡茶黑色透明の石英粒が多く、長石は桃色を呈し、長径2mmに及ぶ自形をなすものが多い。軽石は長径6mmに及ぶものもあり、押しつぶされた様相を呈す。基質の表面は茶色を呈するが、新鮮な面は暗青灰色を呈し、玻璃質で固い。

砂岩：長径15cmで灰白色を呈する角のわずかにとれた角礫である。厚さ2mmの石英脈も認められ、わずかに変質した様相を呈する。構成粒は中粒で、白色粒が多い。

チャート：長径10cmの灰白色、暗青色を部分的に呈する亜角礫である。

以上の礫の観察をもとに産地について述べる。アライト質花崗岩、流紋岩、流紋岩質凝灰岩の礫は角が磨滅した亜角礫や亜円礫で人為的に加工したとみるよりも、自然条件で円磨された礫であると推定される。当古墳付近の礫採集地としては、猪名川川原や第三紀や第四紀の礫層が考

えられる。猪名川の川原から求めたとすれば、上流に花崗岩類や中生代末の火山岩類が分布し、中流に丹波帯のチャートや砂岩も分布するから同礫類の採集は可能である。また、付近には大阪層群等の第三紀から第四紀の地層が分布し、これらの地層中の礫を採石した可能性もある。

流紋岩質溶結凝灰岩は角の磨滅がなく、人为的に露出地から切り出したものと推定される。この礫種、宝塚市から猪名川町にかけてや裏六甲付近に広く分布する中生代末の火山岩類に類似する。分布範囲の最近距離では宝塚市向井山付近、猪名川上流では兵庫県川辺郡丸山付近となり、近くても直線距離で8km、猪名川上流では19kmとなる。この距離以上を運搬したのであろう。

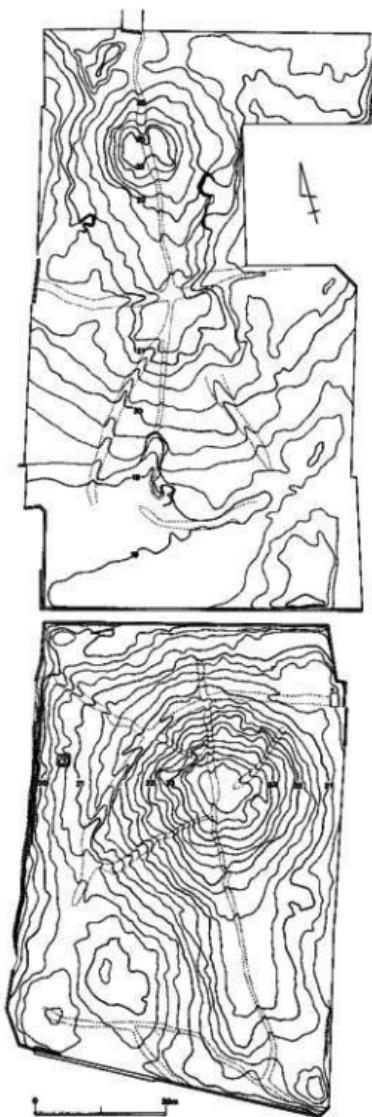
現地踏査の時間がなく、地質図からの推定に終ってしまったが、以上の推定をもとに現地踏査を進めれば、葺石採石地のより具体的な位置を求めることができるであろう。

# 図版



図版1

大石塚・小石塚古墳 墳丘測量図





(1) 小石塚古墳



(2) 大石塚古墳



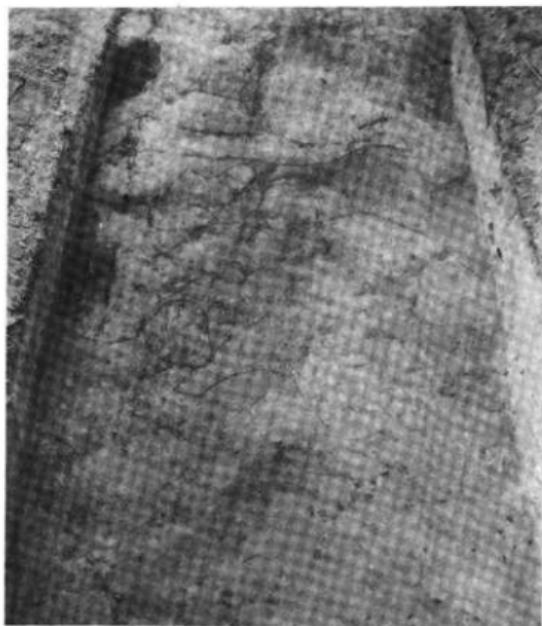
三 縦一・二八六



四 縦一・二八七



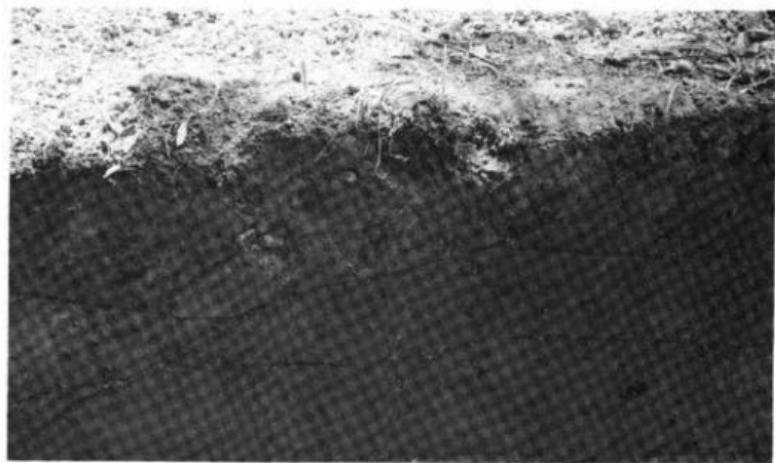
(1) 第7トレンチ 西側くびれ部



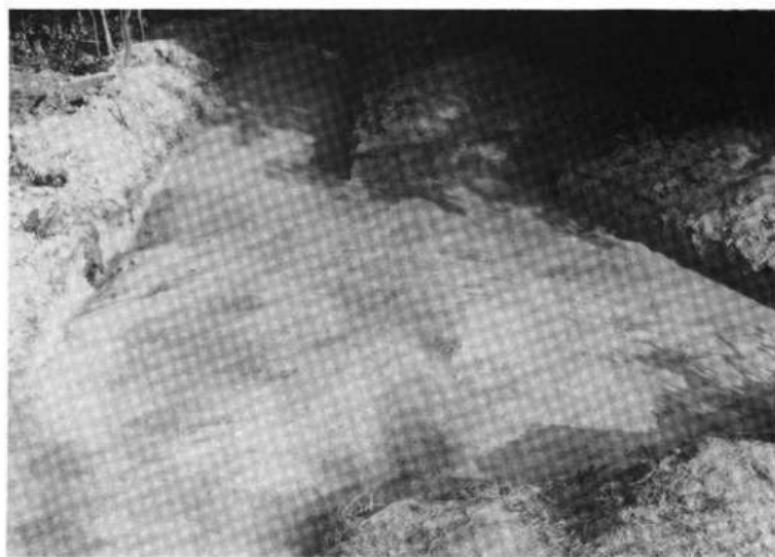
(2) 第6グリッド 東側くびれ部



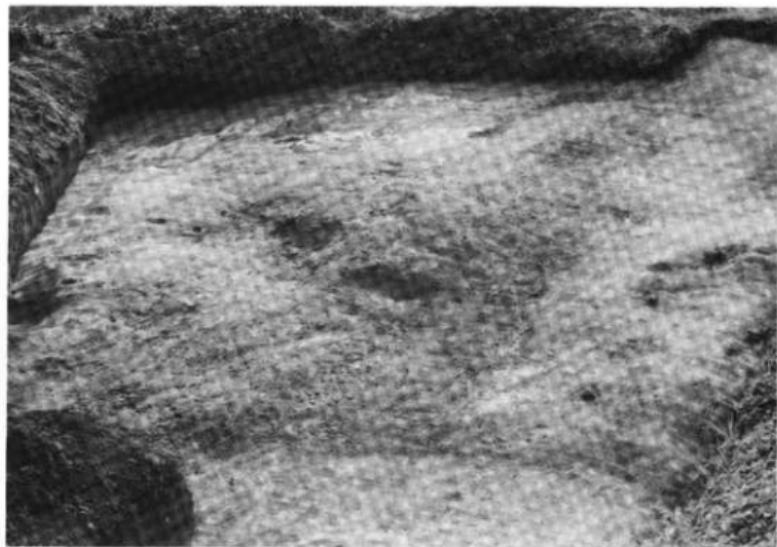
(1) 第8トレンチ 前方部東側



(2) 第8トレンチ 墓丘断面



(1) 第10グリッド 前方部東側コーナー



(2) 第12グリッド 前方部西側コーナー



(1) 第3トレンチ 堀状造構



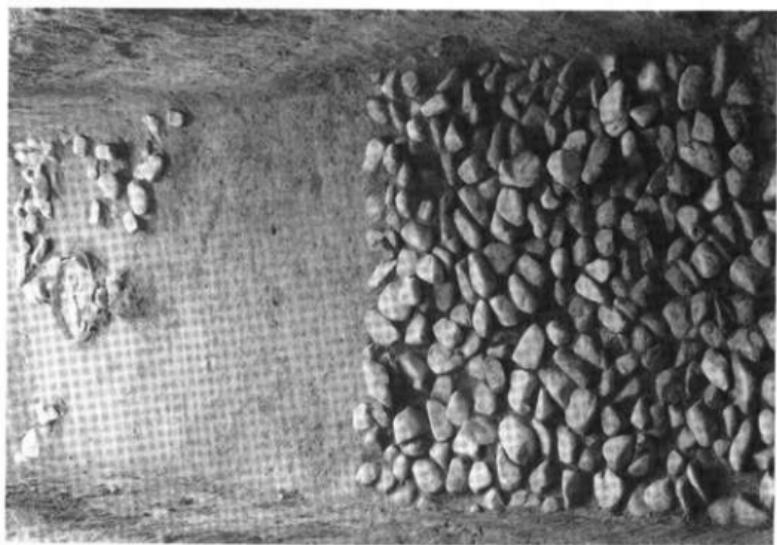
(2) 第8トレンチ 堀状造構外側肩部



(1) 上面



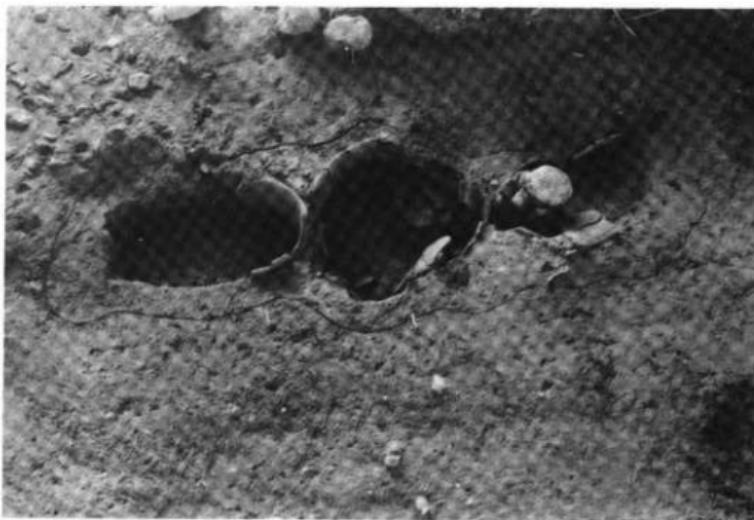
(2) 前方部より



(1) 第4トレンチ 西側部分 1段目疊石・埴輪



(2) 第2トレンチ 1段目疊石・埴輪



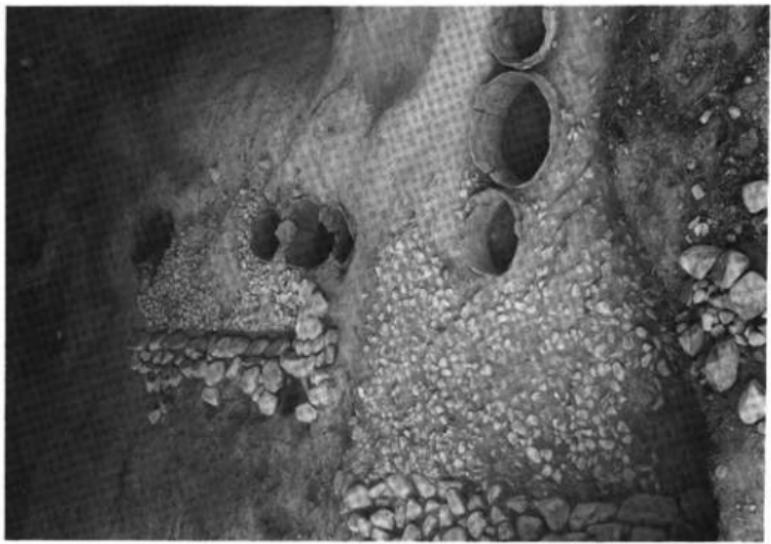
(1) 第4トレンチ東側部分 2段目テラス構造輪



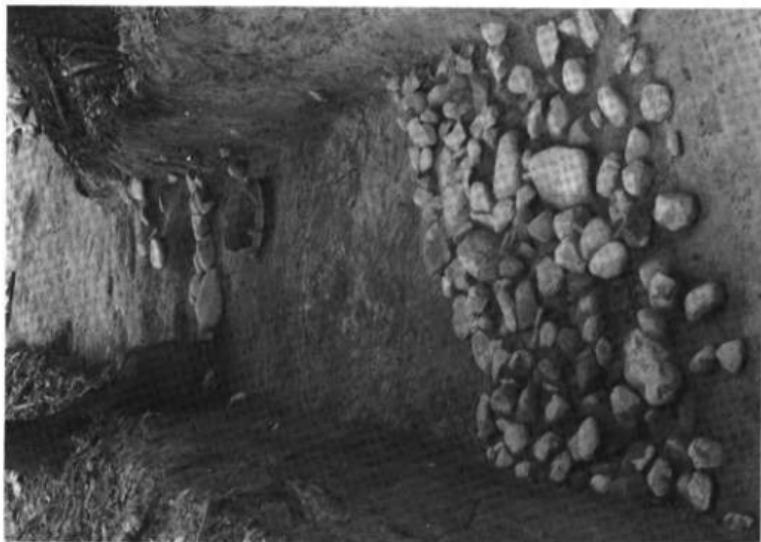
(2) 第6グリッド 2段目テラス埴輪列



(1) 第6グリッド 前方部より



(2) 第6グリッド 後内部より



(1) 第6グリッド 西側くびれ部付近



(2) 第7トレンチ 墳丘北部北道標